



東海支部報

日本山岳会東海支部

No. 154 July. 1. 2018

発行 公益社団法人
日本山岳会東海支部

〒460-0014 名古屋市中区富士見町8-8 OMCビル

電話：052-332-8363 FAX：052-322-7924

郵便口座 00800-5-13749 「日本山岳会東海支部」

銀行口座 三菱東京UFJ銀行 覚王山支店

普通1222073 「日本山岳会東海支部」

編集 星 一男

印刷 (株) 浅井隆文社

湯浅道男さん 大坪重遠さん 追悼特集 本文P25～P30参照



Canadian Northan Cariboo 山群スキー縦走 2018 (本文 P8～P11 参照)

目次

○H30年度支部通常総会	毛利邦男	2	○東海岳人列伝(10)	西山秀夫	16
H29年度事業報告		3	○リレーエッセイ⑧	安藤忠夫	18
H30年度事業計画		5			
H30年度役員		6	○東海支部の蔵書からの一冊⑩	石田文男	20
H30年度組織図		7	○同好会コーナー スケッチ/塩の道		22
			東海俳壇		
○Canadian Northan Cariboo			○支部友コーナー	金谷正起	24
山群スキー縦走成功	菊池 徳	8	○追悼 湯浅氏、大坪氏		25
○「第16回東海岳人写真展」			○委員会報告 亀の会/登山学校		30
開催報告	井上寛之	12	東海Youth/山行		
○初の試み 少年補導委託登山			○会務報告	毛利邦男	32
開催報告	前田隆久	13	○ルーム日誌・会員異動	毛利邦男	36
○第13次インドヒマラヤ登山計画	星 一男	14	○INFORMATION		37
○観桜会開催報告	小川 務	15	○編集後記	星 一男	37

平成30年度支部通常総会

総務委員長 毛利邦男

平成30年度支部通常総会

5月20日(日)午後4時から、平成30年度東海支部通常総会がOMCビル4階講堂で開催された。支部規約による定足数の確認を受け、規約により、高橋支部長に議長を委嘱し議事に入った。

第一号議案として、平成29年度事業報告と決算報告が上程された。山田副支部長の事業報告に関する説明および市川会計の決算報告に関する説明の後、和田監事より適正に処理されていることが確認された。表決の結果第一号議案は承認された。第二号議案は平成30年度の新体制について、役員案及び組織図案が提出された。役員変更については中世古直子監事の退任に伴い後任に天野倅明氏を提案、中世古直子氏を新たに評議員に提案、承認された。また、H30年度組織図案並びに常務委員長の一部交代案についても原案通り承認された。

つづいて平成30年度事業計画案及び予算案が上程された。片岡副支部長による事業計画案について、高橋支部長による予算案についての説明の後表決、原案通り承認された。尚、上程された予算案には記載されていないが、予算案作成後に故大坪重遠氏のご家族から個人の遺志で100万円の寄付があったこと、また若手育成に使ってほしい旨の遺言があったため、チャレンジ基金に繰り入れ、活用させていただくこととなった旨報告があった。

インドヒマラヤ登山隊壮行会

総会終了後、第13次インドヒマラヤ登山隊壮行会が行われた。



隊員全員集合



議長の高橋支部長挨拶

講演会



講師の井上達男氏

壮行会終了後同じ会場にて、神戸大学山岳会会長井上達男氏に『未知への挑戦』と題して講演をして頂いた。講演に先立って配布された資料は15ページからなり、非常にアカデミックな内容となっていた。神戸大学山岳部の活動については1958年のパタゴニア探検隊アレナス峰初登頂にはじまり、カラコルム シェルビ・カンリ7380m初登頂、2009年ロプチン峰6805m、2015年のタリ峰6330m初登頂などの遠征の足跡をのこし現在に至っているとのこと。

懇親会

総会終了後、6時15分から東海支部ルームに場所を移し、懇親会が開かれた。懇親会には、インドヒマラヤ隊と井上達男氏にも参加していただき、大いに盛り上がった。

平成29年度事業報告

期 日	内 容	担 当
I 公益事業		
(1) 登山に関する文化・学術の振興事業		
毎月第3土曜日	猿投の森 自然観察会	猿投の森づくりの会
毎月1回	わいがや講座・緑陰講座の実施-外部有識者および森づくりの会の会員を講師に招き、森林・水保全・生物多様性などの環境機能に関する勉強会の実施	猿投の森づくりの会
5月13日	「外道クライマー」の著者：宮城公博氏「冒険登山のすすめ」の著者：米山悟氏両名による山の魅力・山の多様な登り方・表現方法を語るセッション講座。	技術向上委員会
6月9日	猪熊隆之氏の気象講座	技術向上委員会
6月18日	山本正嘉氏による「登山の運動生理学とトレーニング学」講演会	技術向上委員会
8月11日	御在所山頂及び茶臼山高原に於ける「山の日」啓蒙活動	「山の日」事業委員会
1月6日	山の気象講座-気象予報士小田切正氏の講習会	技術向上委員会
2月24・25日	野口いづみ氏「山の病気とケガ」の講演会24日及び翌日に選抜指導者向け入道ヶ岳実践	技術向上委員会
3月3日	国際認定山岳医三浦裕氏、国際認定看護師浦川陽子氏等によるファーストエイドの救急救命の実習と低体温症の講演会。	技術向上委員会
3月20日～25日	第16回東海岳人写真の開催-名古屋・栄の名古屋市民ギャラリーにて開催、皇太子殿下の特別出品をはじめ支部員・支部員OB達から国内外の山や自然を捉えた87点の作品が出品され、期間中の来場者は2293名を数えた	写真展委員会
(2) 児童・青少年の育成事業		
4月22・23日	知的障がい者支援登山、SON愛知と協働 朝明溪谷で開催。参加者 障がい者7名、保護者7名、SON愛知19名、東海支部31名	ボランティア委員会
9月23・24日	御在所フェスティバル(ゴザフェス)、参加者47名	東海学生山岳連盟
10月と11月	親と子のふれあい登山教室 (尾高山) 参加者は合計248名 (内支部員25名が支援のため参加)	ボランティア委員会
11月11日	ひなご幼稚園「森の探検隊」-ネーチャービンゴ、クラブ体験、遊歩道から紅葉した林内の探検。参加者：園児78名、他に保護者・スタッフ17名	猿投の森づくりの会
(3) スポーツ及び登山に関する教育・啓発事業		
4月～9月	登山教室前期開講 (中日文化センター登山教室、朝日カルチャー登山教室)	登山教室委員会
6月17日～18日	夏山フェスタへの協力	夏山フェスタ実行委員会
7月～	登山学校開校 一未組織登山者への安全登山の啓発と支部の人材確保と育成。経験及び技量に合わせ初級・中級・上級の3つのグループに分け1年間の学習・訓練を实践。受講生：初級：46名、中級：39名、上級：8名、指導員：32名	
10月～3月	登山教室後期開講 (中日文化センター)	登山教室委員会

(4) 事故防止事業

6月～11月	登山教室指導者研修-8回開催	遭難対策委員会
4月～3月	読図山行 計11回実施	図書委員会
随時	チェンソー慣熟訓練・安全教育	猿投の森づくりの会
通年	携帯電話とメールによる登山届の提出促進	遭難対策委員会

(5) 山岳環境保全事業

通年	猿投の森、山桜フィールド及び東大演習林における森づくり	猿投の森づくりの会
毎月2回	定例作業	猿投の森づくりの会
7月9日～11日	自然保護全国大会 岐阜市で開催、11名参加	自然保護委員会
7月2日	清掃登山、猿投山 (HAT-Jと協働)	自然保護委員会
11月26日	猿投の森 法人会員デー	猿投の森づくりの会
通年	両棲類および哺乳動物の生態調査	自然保護委員会

(6) 国際交流事業

8月7日～14日	開催地：韓国蔚山市及び釜山市・参加者数 日本 8 (+2) 韓国 9 (+5) 中国 9 (+4)、内東海支部から5名参加	東海学生山岳連盟
----------	---	----------

(7) その他目的を達成するための事業

5月14日	春のブラインド登山(視覚障がい者支援登山) -美濃天王山. 参加者 39名(内支援者30名-東海支部他)	ボランティア委員会
3回開催	ひまわり登山(視覚障がい者支援登山) -吉田山 他	ボランティア委員会
10月28日	森の音楽祭: 参加者 合計500名(内支部員スタッフ90名)	森の音楽祭実行委員会
11月12日	秋のブラインド登山(視覚障がい者支援登山) -美濃南宮山. 参加者 30名(内支援者22名-東海支部員他)	ボランティア委員会

II 共益事業

通年	支部山行(計画54回、実施36回), 参加人員延254名	山行委員会
通年	支部友山行(計画43、実施33回) 参加 延210名	支部友委員会
随時	支部友ミーティング(計画6回、実施6回)	支部友委員会
通年	定例山行(実施9回、参加延230名)と自主山行(2回実施、参加28名)	亀の会
随時	合宿・訓練・講習; 春山合宿 5月、地図読講習 6月、小川山合宿 8月、雪上訓練 11月、冬山合宿 1月に実施、個人山行 - 随時(年間約200隊)	
通年	定例山行(15回実施、参加延120名)と自主山行(82回実施、参加延215名)	東海ユース
随時	各種同好会が企画する各種活動-スケッチクラブ、東海アルパインスキークラブ、古道塩の道、読図会、TNCC、ネパール文化研究会、山の自然学研究会	同好会
随時	写真展委員会が主催する撮影山行の実施	写真展委員会
1月20日(土)	支部新年懇親会(ウイルあいち)	総務委員会

平成30年度事業計画

期	日	内	容	担	当
1. 公益目的事業					
(1) 登山に関する文化・学術の振興事業					
毎月1回		猿投の森	自然観察会	猿投の森づくりの会	
7月～9月		森の研修会	(緑陰講座)	猿投の森づくりの会	
毎月1回		わいがや講座		猿投の森づくりの会	
随時		森の工作	(間伐材加工等)	猿投の森づくりの会	
通年		森の調査	(植生調査、ギフチョウ・動物定点観察など)	猿投の森づくりの会	
11月		森づくり体験	(法人デー、NICE協働作業)	猿投の森づくりの会	
通年		第17回東海岳人写真展	(2020年3月開催に向けた準備)	写真展委員会	
(2) 児童・青少年の育成事業					
6月14・15日		試験観察中の少年支援登山		ボランティア委員会	
9月		御在所フェスティバル		東海学生山岳連盟	
10月中旬		知的障がい者支援登山	(SON・愛知支援登山)	ボランティア委員会	
10月下旬・11月初旬		親と子のふれあい登山教室	2回 (尾高山)	ボランティア委員会	
11月		森の探検隊	(幼稚園児森林体験) 猿投の森	猿投の森づくりの会	
(3) スポーツ及び登山に関する教育・啓発事業					
通年		中日文化センター登山教室	開講	登山教室小委員会	
6月23・24日		夏山フェスタ	への協力	夏山フェスタ実行委員会	
7月		登山学校	第2期開校	登山学校運営委員会	
8月11日他		「山の日」	啓発活動	「山の日」事業委員会	
(4) 事故防止事業					
随時		指導者養成訓練		技術向上委員会	
随時		事故防止講座	の開催	技術向上委員会	
秋		チェンソー慣熟訓練		猿投の森づくりの会	
随時		遭難予防講習会	山岳救助訓練などの開催補助	遭難対策委員会・山行委員会・青年部	
(5) 山岳環境保全事業					
通年		猿投の森及び東大演習林における森づくり	(雑木林整備・人工林整備・植生など整備) + 民有林整備	猿投の森づくりの会	
通年		JAC山桜フィールド整備	(炭焼き体験、ウッドデッキ作成、シイタケ栽培等)	猿投の森づくりの会	
通年		植生等保護作業	(調査・マーク・保護処置作業等)	猿投の森づくりの会	
通年		林道整備	(沿道草刈・路面整備・枯死木処理など)	猿投の森づくりの会	
7月		HAT-Jとの清掃登山	、猿投山	自然保護委員会	
通年		モニタリング1000里地調査	(哺乳類調査・カエル類調査・カヤネズミ調査)	自然保護委員会	
(6) 国際交流事業					
7月27日～8月1日		日中韓学生交流登山隊の派遣	(中国、青海省)	東海学生山岳連盟	
(7) その他目的を達成するための事業					
5月12日		春のブライインド登山	(視覚障がい者支援登山) , 南信・網掛山	ボランティア委員会	
10月27日		森の音楽祭	と自然観察会他	森の音楽祭実行委員会	
11月初旬		秋のブライインド登山	(視覚障がい者支援登山)	ボランティア委員会	
年3～4回		視覚障がい者支援登山②	(ひまわり山行)	ボランティア委員会	

2. 共益事業

8月	第13次インドヒマラヤ登山隊2018の派遣	海外登山委員会
随時	自主山行, 年3回の合宿	青年部
5月20日	支部通常総会	総務委員会
年6回(隔月)	支部友ミーティング	支部友会
毎月3~5回	支部友山行	支部友会
年間55回程度	支部定例山行	山行委員会
随時	亀の会毎月の定例山行と自主山行	亀の会
随時	定例山行(月2回)と個人山行(年間60回ほど)	東海Youth
通年	リーダー育成事業	東海学生山岳連盟
随時	写真撮影山行	写真展実行委員会
1月(開催日未定)	支部新年懇親会(場所未定)	総務委員会

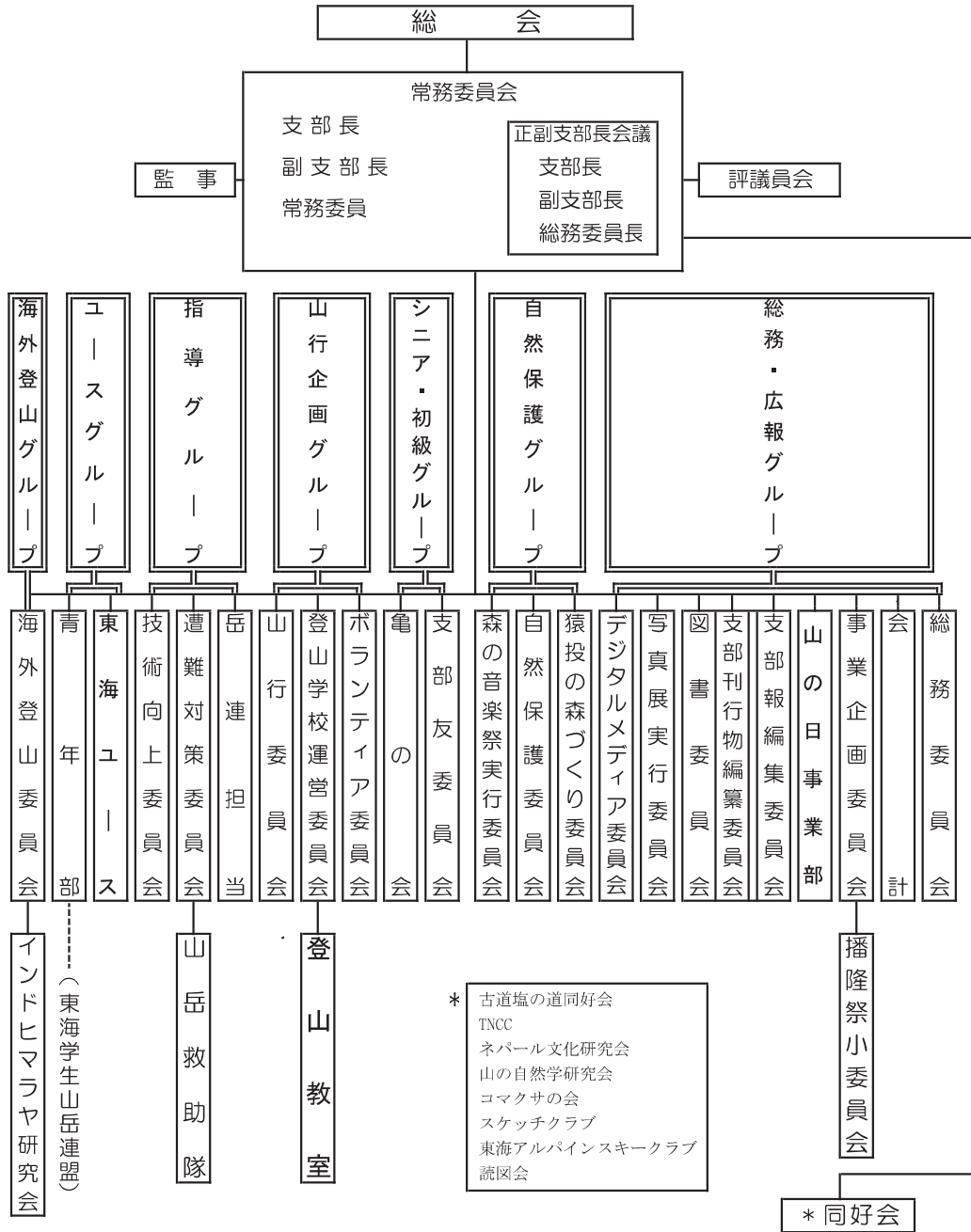
平成30年度 役員

名誉支部員	石原國利			
支部長	高橋玲司			
副支部長	山田明美	佐野忠則	片岡泰彦	
監事	和田豊司	天野淑明		
常任評議員	尾上 昇			
評議員	大口瑛司	杉田 博	箕浦靖夫	横田明信
	梶田民雄	柴田清康	沖 允人	野呂邦彦
	橋村一豊	中世古直子		

常務委員会	委員長	常務委員会	委員長
総務委員会	毛利邦男	登山学校運営委員会	<u>榎 将美</u>
会計	市川義行	登山学校	高橋玲司(校長)
岳連担当	鎌倉源助	自然保護委員会	井藤恵美子
支部友委員会	尾上 昇	図書委員会	石田文男
山行委員会	鈴木慎吾	海外登山委員会	高橋玲司
亀の会	加藤守彦	ボランティア委員会	前田隆久
猿投の森づくりの会	小川 務(代表)	支部刊行物編纂委員会	星 一男
東海ユース	<u>服田康弘</u>	遭難対策委員会	山田明美
事業企画委員会	毛利邦男	技術向上委員会	片岡泰彦
「山の日」事業本部	佐野忠則(本部長)	写真展実行委員会	<u>山内 薫</u>
播隆祭小委員会	尾上 昇	森の音楽祭実行委員会	箕浦靖夫
支部報編集委員会	星 一男	デジタルメディア委員会	井上寛之
青年部	鎌倉源助	東海学生山岳連盟	<u>丹羽大樹</u>

注：下線付きは新任、その他は重任

公益社団法人日本山岳会東海支部
平成30年度組織図



・正副支部長会議はチャレンジ基金等の使途を含めた支部業務全般の調整を行う。

Canadian Northan Cariboo 山群スキー縦走成功

青年部 菊池 徳

Northan Cariboo 山群はカナダ、ブリティッシュ・コロンビア州の東部、カナディアン・ロッキー山脈の主脈の西側に並行して横たわるカリブー山脈の北部の総称で、氷河が発達しており、太平洋側のバンクーバーに向かうフレーザー川の源流部にあたる。

今回はその山群に横たわる氷河を南から北へ、ヘリを使ってスタート地点のAzure passへ入山し、ゴールのMcBrideまでの140kmの縦走を最大11日間で計画した。食糧はMont-bellより提供頂いたα米をベースとした日本製の軽量な乾燥食品で揃え、一人当たりのザックの重量は25kg程に納める事ができた。

カナダの氷河スキー縦走のテクニカルな部分としては、地図に加え、衛星写真と過去のパーティーからの情報を元に予めルートを設定した上で、刻々と変化する地形、氷河の状態、天候と雪質などを踏まえ、実際に現地でもルートを組み立てながら、辺境故に退路の無いルートを実際にスタートからゴールに向けて進んでいくところだと感じた。

メンバーはカナダ・ACMGスキーガイドの秋山裕司と谷 剛士(アルパインガイドでもある)、北海道でキャットスキーガイドの星野千春と私の4名。



左から星野、菊池、秋山、谷

結果から言うと、荷物を軽量化したことによるスピードアップ、予想以上の好天により視界良好でスムーズに進む事ができ、過去3パーティー(1983年、2008年、2017年)が10日以上かかった縦走を8日間で完走する事が出来た。

◆Day.1 (2018 4/17)

Time : 5hr (14:50-19:50), Distance : 6.5km, Vertical : ↑927m ↓289m

僕らの住むCanmoreから北に450km、ヘリポートのある街Vermountまで移動。連日天気安定せず、入山のタイミングがつかめずに居たがこの日は午後から晴れる予報でギリギリ入山出来るかと踏んで出発した。ヘリポートから入山予定地までの距離は直線距離で42kmであったが、その途中の山群を飛び越えて行く事はリスクが高いため、谷扱いを飛ばす8km約30分のフライトとなった。



入山時。荷物は重いが入取りは軽い

さあ一日目は標高差900m登り、300m下った先にある平らな氷河まで。視界は30m程で目指すコルまでの視程が利か無い為GPSで位置確認しつつ、ムチ(スキーボールの先に付けた5mのスリング)を振り回し地形判断をしながら進んで行く。視界の悪い大きな斜面を進む事はとても神経を使うし時間がかかる。

しばらく進むとムチの先が割れ目に落ち、不自然な割れ目を発見した。プロービング(プローブで雪の厚みを確認しクレバスかどうかを確認する事)すると1m右のポイントでは厚みが1m程となっており、クレバスっぽい感じの空間を確認できた。そこからは40mのロープを10mの間隔で結び合い、右に走るクレバスを避けて進路を取る。先頭はムチを振り、必要があればプロービングしながら進む。しばらくすると左手に50m程横に走った破断面(スラブ雪崩が起きた発生面)が現れた。

ロープは外し、先頭の秋山はポールで簡単な積雪チェックをしつつ、雪崩の可能性があ

る斜面を足早に進み、斜度が落ちた雪崩の起きない斜面まで到達すると後方の僕らにオッケーサインを出した。後に続き、緩やかな斜面を越えて目的のコルへ到達する事が出来た。

ここからはスキンを外し、スキーで下るだけだが、視程は同じく30m程。歩きの場合と滑りの場合とでスピードが倍違い、滑る時にこの視程は大変辛い。GPSを頼りに進行方向を確認し、視程範囲にある雪面から飛び出た岩を頼りに斜面がつながっている事を信じて点と点を線で結んでゆく。しばらく進むと割と平らな場所に辿り付き、GPSを確認するとキャンプ予定地であることが分かった。時間は20:00、一日目から順調な滑り出しであった。

◆Day. 2 (2018 4/18)

Time : 11hr (6:45-17:50), Distance: 16.3km, Vertical : ↑784m ↓771m

風避けブロックとテントの隙間に雪が積もり、テントは4人用から3.5人用になっていた。端に寝ていた為身体の半分はひんやりし、しばらくもじもじしていたが、谷の赤いヘッドライトで5:00に起床。

同じ高さを保ってしばらく歩く。視界は無かったがGPSは予め目星を付けた目的のガリー付近にいる事を示している。カナダの地図では等高線が広い狭いかの記載のみである為ガリーを明瞭に読み取る事は難しい。

ジグを切りながら登って行くと右手に岩があり、地形も細いガリー状となっている事が



広大な氷河にトラックを1本だけ

分かってきた。斜度は45°程で幅は10m程。ジグを切るには狭くなり、雪面も硬くしまっている為、板は担ぎ、ブーツバック(ツボ足)に切り替える。いつの間にか頭上の雲は足元になり、頭上は青空、先に見える氷河が一望で

きて広大な氷河縦走に來た事を実感した。

この日は16kmを快適に進み、夕日が一望できる優雅なキャンプ予定地に18:00頃到着。昨晩濡れた寝袋を干しつつ、雪面にテーブルとベンチを切り出し、100gのα米を足したカレー飯を食べ、日が落ちる前には就寝した。(この時期のカナダは22時近くまで明るい)

◆Day. 3 (2018 4/19)

Time : 10.5hr (6:30-16:00), Distance : 22.75km, Vertical : ↑1000m ↓1100m

放射冷却で良く冷えた朝。いち早くテントを出た谷は一番星を発見した模様で天気は最高なようだ。

氷河を越え、樹林帯の斜面をひたすら横移動し、途中立枯れた木を燃やしたりしつつ快適に進み、快晴の中22kmを歩いた。氷河末端のモレーンの中、懸垂氷河が見えるグレーシャーキャンプグラウンド(勝手に命名)を発見。目標地まで標高差200m程足りなかったが、そこを今日のキャンプ地とした。横移動は足に負担が大きく、皆靴擦れの痛みを感じていた。

◆Day. 4 (2018 4/20)

Time : 8.5hr (6:30-15:00), Distance : 18.75km, Vertical : ↑457m ↓1530m

前日の靴擦れによる痛みが少しあり、踵を浮かせないように丁寧に一歩ずつスタートする。昨日残り残した200mを登りこの縦走中最大のNiagara氷河へ進む。この氷河、大き過ぎるためかイマイチ進んだ距離を感じない。目標地点が近づくどころか遠ざかっているようにも思えたが、目標地点まで6kmを2時間程で到着した。そこから氷河の末端の懸垂氷河帯を高巻きして越えるのだが、右側は1000m以上に渡って谷底まで切れ落ちており、左側は越えてきた200mの斜面。落ちるなら左側だね!と言いつつ。左右に雪庇の張り出した稜線を右左に交わしながら板を担ぎ、ブーツバックで登る。露出感のある急登を終え一息つき、再び板を履いて少し登った後スキンを外してしばらく横移動。残すはNiagara Creekへ滑るのみである。

Creekまで下りしばらく進むとオオカミやウルバリンがいたり、天然のビーバーダムなどがあり、人の手が届いてないままの自然で溢れていた。Niagara氷河を源とするNiagara Creekは林業用の道路等も届いてない、最後

の未開の溪谷とも言われ、そこに入った人類はこのスキー縦走にトライしたパーティーだけだと思われる。川からの水も、枯れ木も取れる場所を今日のキャンプ地とした。谷が切り倒してくれた大きな枯れ木のおかげで焚火は盛大、星野がこっそり持って来たラムもあって最高の夜であった。

◆Day. 5 (2018 4/21)

Time : 2.5hr (9:30-12:00), Distance : 4.4 km, Vertical : ↑205m ↓50m

昨夜から降り始めた雨は朝になっても降り続き、Creek内には雪崩や落氷の音が鳴り響く。誰か先に起きないかな～みな探りあう感じで、誰も起き上がろうとはしない。

inReach(衛星電話のようなモノ)を使って天気予報をチェックすると、少し標高を上げると気温も低く、雪に変わるとの情報であった。8時になる頃、雨も止んだので起床し、手早くお湯を沸かしてご飯を食べて出発する。少し歩いている間に雲は消えさり、予想外に太陽がみえはじめた。燦々と降りそそぐ太陽の光は大地の雪を溶かし始め、あたりでは雪崩の音も聞こえ始める。これから向かう場所は兩岸に大きな斜面を持った雪崩地形であり、この天気に向かう場所ではない。しばらく歩いた先の開けた場所に着くなり、おのおの昨晚の雨でびしょ濡れになったギアを乾かし晴れ間が落ち着くのを待つ事にした。しかし曇る気配は全く無く、晴れ間は本気なご様子。近くに素敵なキャンプ地を発見したため、この日はしっかり装備を乾かして軽量化し、明日に備える為にも今日はここでキャンプする事でみな意見は一致した。



5日目の最高のテン場にて 焚火を囲むメンバー

雪面を掘り下げて作った暖炉とキッチン、倒木のベンチ、完璧に整地したフラットなテント場、おまけに近くの川から水も取れるキャンプサイトは何日も住みたくなる。あたりの枯れ木を2本切り倒して大量の薪もゲットでき、この日の焚火は盛大でいくつかのギアは飛び火で穴があいたりもしたが、日中干した寝袋はパリパリで快眠であった。

◆Day. 6 (2018 4/22)

Time : 10.5hr (5:00-15:30), Distance : 17.5km, Vertical : ↑1900m ↓685m

一日たっぷり休み、今朝は4:00に起床。いつも通り隊長の谷が一番にテントを出ると同時に残る3人はテント内の片付けを始め、谷が朝食を作っている間に準備とテントの撤収を行うこの分担も2日目から固定されていて6日目になると全く無駄が無い。

明るくなる前に出発し、気温が低く、雪崩リスクの低い時間帯に雪崩地形をやり過ごす作戦である。この日も快晴で快調に進み、核



初滑降の斜面。ピークの少し右から滑りこんだ。

心部に到達。他に最適なポイントがないか探る為、右にあるピークを登り、ラインを探る。

斜度は45度くらいに立って見え、左側の下部は崖のようにも見える。先頭は谷から滑り始めた。左に落ちるのを避けてスキーカット(雪崩をチェックする手段の一つ)をしつつ安全そうな右の斜面へ進んでいく。途中の斜面で一度集まり、下方まで続く斜面を次のポイントまで滑り始める。最初の2ターンはスラフ(滑り落ちる雪)を確認しつつ、大丈夫と判断するなり残る200m程であったが、まだ誰も滑った事が無い斜面に無心にターンを刻んだ。思いがけないご褒美があるからこの遊びはやめられない。



4月後半とは思えない最高の雪

一同滑った斜面に満足しつつ次のポイントへ登り始める。一つピークを越えるとこれまで素晴らしい斜面があった。素晴らしい雪と初日に比べるとずいぶん小さくなったザック



6日目、氷河上最後のキャンプ地。

を背負いみんな調子に乗って滑る。調子に乗りすぎた谷は大転倒した。

そこからさらにピークを越えるとキャンプ地に到着し、この旅最後の氷河キャンプを楽しんだ。この先の話は正直消化試合と言った感じで、記録程度させて頂く事をお詫び申し上げます。

◆Day. 7 (2018 4/23)

Time : 10.5hr (6:30-17:00), Distance : 37.0K

登山には必ず登山届けを提出して下さるようお願いいたします。

◆支部(各委員会)主催の山行の登山届提出先 :

①東海支部ガイドブックの一覧にある地元警察署と

②東海支部 : メールで登山届けメールアドレス jactokai103@gmail.com に提出のこと。

東海支部に提出された登山届けは、日本山岳会本部 (keikakusho@jac.or.jp) に自動転送されますので、別途本部への提出は不要となりました。

◆それ以外の山行(個人山行、同好会山行など)の登山届提出先 :

①東海支部ガイドブックの一覧にある地元警察署への登山届とは別に

②東海支部への届け出も忘れずお願いします。

東海支部登山届提出先 : A) 携帯電話 080-2632-3776

B) メールアドレス jactokai103@gmail.com (本部へ自動転送されます)

C) Fax 052-322-7924 のいずれかの方法で提出のこと。

m, Vertical : ↑920m ↓2250m

核心は終わり、残るは消化試合と思われた日だったが思ったより雪が良く滑りも楽しい一日。予想以上にスキーを有効に使える場所が多く、快適に進む事が出来た。途中、滑り終えた氷河を見ると意外にクレバスが多いことを再認識する。おかげでこの日は37km移動することができ、今回はホントに天気に恵まれた事を確信した。林業用の道路の脇に最後のキャンプ地を設営し、残った食料を食べつくした。この旅ももう終わりかと思うと、最後の焚火の名残を惜しむ。

◆Day. 8 (2018 4/24)

Time : 1.5hr (6:30-8:00), Distance : 12Km, Vertical : ↑33m ↓290m

最終日、残りは数十キロ程であったが道路は凍っていた為板が良く走る。1.5時間でデポしていた車に到着し、130kmの旅はあっけなく終わってしまった。まだ早朝であったが、旅の完走を祝いデポしていたビールで乾杯し、家路に着いた。

今回、私にとっては初めての長期氷河スキー縦走であったが、経験豊富で強いメンバー、綿密な計画、信頼できるギア、好天、全てに恵まれ、安全で迅速に完走することができた。

今回この旅をご支援頂きありがとうございました。この場を借りて、チャレンジ基金のサポート頂いた日本山岳会東海支部、ギアをサポート頂いたモンベル、バーナーをサポート頂いた新富士バーナー皆様にお礼を申し上げます。

本当にありがとうございました。

Total Distance: 139.3Km, Ascent: 6,229m, Descent: 7,045m, Flight: 37min

「第16回東海岳人写真展」開催報告

写真展実行委員会 井上寛之

第16回東海岳人写真展「山と自然のパフォーマンス」を、3月20日から25日までの6日間、名古屋市民ギャラリー栄7階の展示場で開催しました。

支部員、支部友会員75人による87点の作品(海外37点、国内50点)を展示しました。

展示された作品は、国内、海外の山岳のみならず、高山植物や自然の風景、登山者の姿などに加え、身近な猿投の森での動物や野草の写真など、支部員の活発な活動を反映して幅広い題材を対象とした生き生きとした写真ばかりでした。

開催間中には、一般市民のかた2,293名が会場を訪れ、展示された作品を鑑賞して、自然の美しさや登山の楽しさに触れられました。また、出展者以外の支部員も多数の方が会場を訪れ作品を鑑賞すると同時に、支部員同士の交流の場ともなりました。

多数の方に応募頂いたおかげで、出展料の一部を出展者に返却するなど財政面では健全な運営が出来ました。一方、前回依頼した業者が廃業したため、作品のパネル作成を新規業者に依頼したところ、品質にかなりの問題が発生して出展者の皆さんにはご迷惑をおかけしました。実行委員会として、改めてお詫びいたします。

次回に向けては、作品の展示方法の再検討、業者選択の見直しと、展示の目玉となっていた皇太子殿下の作品の展示に代わるものの検討など課題もたくさんあります。

実行委員会では、今回の経験と反省を踏まえ、次回第17回に向けて、さらに向上を目指

し、東海支部の中での大きなイベントとして発展させてゆきたいと考えていますので、今後も協力をよろしく願います。



皇太子殿下の作品を見る人たち



写真展会場の様子



写真展開催を伝える中日新聞



最終日に出演者全員で記念撮影

東海支部初の試み、少年補導委託登山

ボランティア委員長 前田隆久

名古屋家庭裁判所と協力して、試験観察中の少年に登山を経験させる「短期少年補導委託登山」が、6月14日(木)、15日(金)の一泊二日で、鈴鹿・朝明溪谷をベースに行われた。

東海支部の新たな公益事業としての位置づけで、昨年から数回に渡り名古屋家庭裁判所と調整を重ね、ようやく実現にこぎ着けた。日本山岳会の類似の試みとしては、宮崎支部が2002年から実施している宮崎家庭裁判所委託登山があり、昨年2月にはその功績が認められ、福岡高等裁判所長官から感謝状を授与されている。今回の試みは、裁判所の管轄こそ違いますが宮崎支部の実績が名古屋家庭裁判所でも高く評価され、この種の行事としては異例の早さで具体化した。

試験観察とは、家庭裁判所が観察中の少年達の最終的な保護処分を決定するために、調査官が生活態度を観察して様子を見る制度で、最終的な決定をするための判断材料を評価する機能と、少年の社会での更生を働きかける機能がある。私たちとしては、2つ目の機能に共感し、一緒に山を登り、登山の苦しみを乗り越えて登頂を成し遂げる達成感を少年たちに感じてもらい、山の大きく美しい自然から、立ち直って行くパワーを感じてもらえればという思いから事業化を進めて来た。

今回は、家裁で募集した少年2名、家裁の調査官1名、支部ボランティア委員会から9名の総勢12名が参加した。14日午後、名古屋家庭裁判所に集合、裁判所内で参加者全員で主旨を確認した後、車3台に少年達と委員会メンバーが分乗して朝明茶屋に向かった。到着後は開会式、飯盒炊爨のための火おこし、薪割り体験、BBQでの夕食をすませ、就寝までは、尾上ボランティア委員の経験豊富な山にまつわる話と1966年の日大山岳部グリーンランド・フォーレル峰(3360m)登頂の貴重な記録ビデオを鑑賞して時を過ごした。尾上委員の実体験に基づく、登山、山の話は彼らにも大きな感銘を与えたと思う。

15日は、夜半からの雨が明け方に一段と激しくなったため、北アルプス・立山の紹介

と登山ビデオを見ながら待機、小やみになるのを見計らって、当初のコースを朝明溪谷周辺のハイキングコースに切り替えて雨上がりの新緑の中を1時間程散策した。本来ならば、低くてもいいので少年たちに登山を体験させてあげたかったのが、名古屋に戻る時間に制限があり、やむをえない選択となった。それでも、普段自然になじむ機会に恵まれない彼らにとっては貴重な1時間であった。それは、終了後の彼らの感想にもあった。

コース変更のため結果的には予定よりも早めに名古屋家庭裁判所に戻り、裁判所内で参加者全員が感想を語り合い解散した。

行事として彼らと再会することはもうないかもしれないが、私たちとしては「晴れた日に、もう一度彼らを山に登らせて上げたい」という思いが強く残った。「プライベートでもいいから、声を掛けてもらえれば、同行するよ」という言葉が、何人かの委員会メンバーからも出た。2日間の行事ではあったが、彼らに親しみを感じた。今回参加の少年たちは、ごく普通で、素直で、笑顔が素敵で、瞳の綺麗な、礼儀正しい少年たちだった、何が原因で問題を起こすのか、何をきっかけに問題を起こすのか、考えさせられる2日間だった。雨上がりの森の中を一緒に歩いた時、彼らの発した言葉、「緑がきれい、きもちいい」の一言に、自然の、森の発する力と、彼らの立ち直りへの可能性を感じた。

天候には恵まれなかったが、少年をも含めた参加者全員の感想も良好で、初回としては成功であった。解決すべき課題も見えてきた、裁判所の評価もあり、この試みが今後続くかはこれからだが、委員会としては春と秋の年二回行っていきたい。彼らのためではなく、他のボランティア委員会行事(視覚障がい者支援、知的障がい者支援、幼稚園児支援)と同じで、私たちにとってもやりがいであり、楽しみであり、多くの事に気づかされる山行行事だ。今回そんな機会を与えてくれた少年達にも感謝したい。

第13次インドヒマラヤ登山計画について

インドヒマラヤ登山隊隊長 星 一男

第13次インドヒマラヤ登山隊2018は、インドヒマラヤ・スピティー地区のカルチャ・ナラ流域にある6060m末踏峰の登頂を目指すため、昨年春より準備を進めてきた。隊員の募集を行うと共に昨年7月には、カルチャ・ナラ流域の偵察を行って、装備、日程などプランを作成した。

今年3月には隊員が確定し、4月23日の常務委員会で遠征計画が承認された。また、4月30日付けでIMF(インド登山財団)より登山の仮許可を取得し、隊員全員で出発に向けた準備を進めている。5月17日の支部総会時には、遠征隊員全員が出席して壮行会も行われた。

今回の遠征は、①遠征隊を継続して出すこと②隊員の若返りを図ること③10次隊から継続してカルチャ・ナラ流域での探検的登山を行うこと、が主たる狙いである。

高橋玲司支部長、および鈴木常夫前評議員、海外遠征をされた先輩諸氏から多くの助言をいただき実現した。全員登頂を目指して、万全の準備で出発したい。



壮行会で隊員全員集合

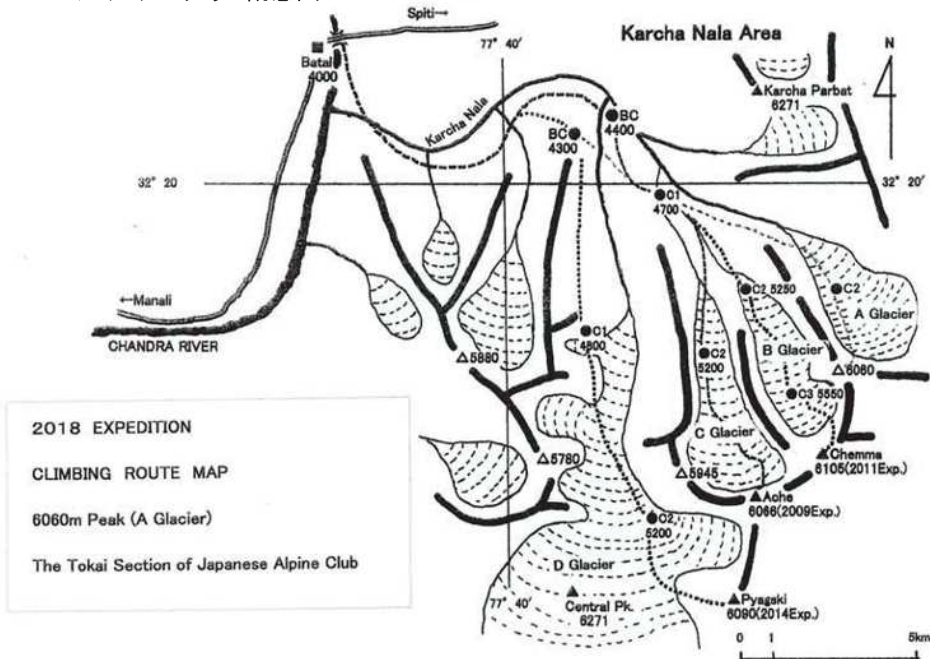
隊の構成

総隊長：高橋玲司 支部長 隊長：星 一男(67)
登攀隊長：塚原孝司(64) 隊員：木股修一(66)
隊員：須田克正(63) 隊員：長谷川妙子(50)

目指す6060m無名峰は、9次隊より踏査と登頂を行っているカルチャ・ナラ川源頭部にあるA氷河に位置する末踏峰である。

行動期間は、8月2日と8月4日に分けて日本を出発 8月8日にキャラバンスタートし、BCは13日に設営し登山活動を開始の予定である。帰国は、8月28日を予定している。

カルチャ・ナラ 概念図



ヤマザクラ観桜会開催報告

猿投の森づくりの会 尾関正吉

ヤマザクラ観桜会を4月14日開催した。自然は人間などの思い通りにはいかないようだ。猿投山のヤマザクラの見頃は平年では4月10日頃だが、今年の観桜会は前週の半ばには既に花吹雪が舞って、当日14日には散りつくしていた。1月、2月の強い寒気から一転3月に入ると初夏を思わせる暖かい日が続き、2日続けて夏日となるなどの季節外れの陽気で、名古屋のソメイヨシノの開花も観測史上4番目に早い3月19日だった。

桜の花は無くなって新緑の季節となってしまったが、曇り空の下、一般参加者、会員併せて約70名、水野お狩場太鼓の子供さんたちと先生、ご父兄を含め総勢100名近くが集まっていた。太鼓演奏とヤマザクラ巨木の道など森の散策を楽しんでいた。

演奏会では水野お狩場太鼓の子供たちが元気に太鼓の音を森に響かせ、時おり呼応して鳥のさえずりも聴かれた。森にちなんだ曲も演奏していただき、指導にあっているような先生の篠笛とのコラボ演奏、さらには先生の篠笛独奏では曲の中に「さくら」の旋律を取り込んで演奏していただけるなど、参加者の皆さんの心に響く演奏会になった。ような先生ご自身も子供太鼓の出身で、その後、太鼓、篠笛奏者として活躍されている。

演奏会后、4グループに分かれてヤマザクラの巨木の森、北歩道の散策コースを観察していただいた。



演奏会の後、観桜会に参加

ヤマザクラだけではない、色々な木の芽吹きや草花など、名古屋に近いこの森の魅力に



子供太鼓の熱演・聞き入る参加者



子供太鼓と篠笛との競演

ついて案内人の解説を受けながら小一時間歩いていただいた。終わった後のアンケートの声でヤマザクラの花が見られなくて残念がる声もあったが、手入れされた気持ちの良い新緑の森を楽しめたという声もたくさんいただいた。

お狩場太鼓の子供たち、お母さん方も森の中を歩きたいということで、一休みした後で少し森の散策を楽しんでもらった。

三つ又広場に戻ると暖かい豚汁が待っていた。みなさん持参の弁当のおともに、美味しく召し上がっていただけたようだ。

午後予定していたツツジの群生などが見られる下流地区の散策は、天気が下り坂の予報であったので止むを得ず中止とした。

来年はヤマザクラの花に出会えることと、四季折々に楽しめるこの森を時々みなさんに訪れていただけるようお願いし、閉会とした。

東海岳人列伝(10)

～エベレストに果てた登山家・尾崎 隆～

編集委員 西山秀夫



筆者が尾崎隆を知ったのは『果てしなき山行』(中公文庫)を読んだからだった。新聞等で亀山市の出身であること、フランス人の女性と結婚し、子供もあることが報じ

られた。それからエベレストでTVの取材登山中に死亡が伝えられた。東海地方きっての世界的な登山家にも果てはあったのだ。それがエベレストのデスゾーン地帯というのもプロの登山家らしい死に場所だった。

インターネットの検索でカテゴリを整理してみよう。

ウィキペディアによると「1952年9月9日～2011年5月12日)は日本の登山家。三重県亀山市生まれ。」で、亡くなったのはまだ7年前のことなのだ。

「1952年三重県亀山市にて3人兄弟の次男として生まれる。三重県立四日市中央工業高等学校入学後、山岳部に入部。卒業後就職。1972年にフランスで植村直己と10日間ほど自転車旅行を行った。ドリュボナッティ稜、グランドジョラス北壁登攀。1974年10月「第2次RCC中部支部」に加入。

1980年世界初のエベレスト北壁からの登攀(とうはん)に成功。以後、数々の前人未到の記録を残し、8000メートル峰のスターと呼ばれた。世界の8,000m峰14座のうち7座の登頂に成功した。1983年ネパールカトマンズのフランス大使館に勤めるフランス人と結婚。1男1女を儲ける。以下登山歴と重なるので省略。

登山歴に著作歴と書籍の表紙、西暦に年齢を編集した。

1972年(20歳)グランドジョラス[北壁](4,208m)登攀。

1974年日本山岳会に入会。

1977年(25歳)ブロードピーク(8,047m)登頂。

1979年(27歳)マッキンリー[南壁](6,194m)から登頂。

1980年(28歳)エベレスト[北壁](8,848m)に重広恒夫と共に登頂。北壁からの登頂は世界初。

1981年(29歳) マナスル(8,156m)無酸素登頂。

1983年(31歳)ローツェ(8,516m)登頂。エベレスト[南東稜](8,848m)に山田昇、村上和也と共に登頂。

フランス人フレデリックと結婚。

1984年(32歳)カンチェンジュンガ(8,586m)登頂。

1985年(33歳)アイランドピーク(6,189m)に妻子とともに登頂。



1986年(34歳)シシヤパンマ(8,013m)登頂。『果てしなき山行』中央公論社から出版。

『ヒマラヤの子守傘—一歳児を連れて』フレディリック夫人と共著で河出書房新社から出版。



1989年(37歳)『ヒマラヤ冒険家族』山と溪谷社から出版。

1991年日本山岳会を除籍。

1996年(44歳)カカボラジ山(5,881m、ミャンマー最高峰)登頂。第1回植村直己冒険賞受賞。



1997年(45歳)『幻の山、カカボラジ—冒険家族、ミャンマーの最高峰初登頂』山と溪谷社から出版。
2001年(49歳)マカルー(8,463m)登頂。
2010年(58歳)キリマンジャロ(5,149m)登頂。
2011年 5月12日(58歳)エベレスト南東

稜登攀中8,500m付近で死亡。

どうだろう、登山と著作を時系列に並べてみると、これまでの東海岳人列伝の諸氏とはケタ違いのスケールで活躍していたことが分かる。8000Mの巨峰14座のうち7座に登頂。人生の盛りを登山に打ち込み、著作を残した。老いを知ることなく死亡したのは登山家としては幸福だったとも言える。

当時の中日新聞の報道に尾上昇会長(当時)は「山で死ぬことは登山家の宿命」と語っている、同時に「高山病で死ぬような男ではない」と記載。一時東海支部にも所属していた。

新聞が報じた記事を転載する。「植村賞の登山家・尾崎隆さん遭難死 エベレスト頂上付近 (5.14朝刊)」

世界最高峰エベレスト(8848メートル)に挑んでいた登山家の尾崎隆さん(58)＝三重県出身＝が12日、標高8400メートル付近で亡くなった。日本山岳ガイド協会の磯野豪太理事長が13日、明らかにした。尾崎さんは4月中旬、エベレストのネパール側キャンプ入り。エベレスト登山をテーマにしたテレビ番組の撮影が目的だった。

11日深夜、ネパール人の高所ポーター2人と約8千メートルの最終キャンプを出発。

だが、頂上直下で体調を崩して下山を始めた。8400メートル付近で動けなくなり、そのまま死亡したと見られる。

必見!「登山家アルピニスト 尾崎隆」と題した亀山市公式ユーチューブが見られます。生立ち、石水溪の鬼ヶ牙、藤内壁でのトレーニング。愛知学院大学山岳部0Bとの出会いからエベレストでの死までの業績を動画でたどる。

これが縁で尾崎は、愛知学院大山岳部の監督と学士山岳会の会員になる。

<https://www.youtube.com/watch?v=wQMoEE-5cd4>

2015年7月12日公開。地元にも大切にされている登山家だった。「僕は、やっぱり花も木もある鈴鹿山脈が好きだな」と結ばれている。ふるさとの山は野登山であった。

本稿を書いている5/23にエベレストの闇という記事を読んだ。「商業登山の幕開け以来、エベレストでは料金を払って登山をする人々をめぐる懸念に悩まされている。多くの人が転換点だったと語る1996年には、エベレスト山頂から下山中に8人が死亡した。その中には極度の高所での経験があまりない者もいた。その年に登山ガイドを務めたロブ・ホール(Rob Hall)氏は「十分な決意があれば、どんな愚か者でもこの山は登れる。だが登山の成功とは、生きて下山することなのだ」と語ったと伝えられている。中略。エベレスト・ガイド、アン・ツェリン・ラマ(Ang Tshering Lama)氏は、登山者のエゴを非難する。「人は『私は登った』と言う。だが『私は登山家だ』とは言えない」とラマ氏。「この山に登るには、登山家でなければならないのだ」と辛口の批評が掲載。経験を積んだ屈強の登山家・尾崎でさえ、下山できなかった。

ここでも加藤幸彦の言葉が生きてくる。加藤は過去の成功(の経験)を忘れよ、と書いた。8,000メートル14座のサミッターの竹内洋岳氏は『登山の哲学』の中で経験を重ねるのではなく、並べると書いた。

ヒマラヤから無難に生きて下山するのは登頂よりも難しいことを今回の尾崎隆の業績を概観して痛感した。5月21日にエベレストを下山中の栗城史多さんの死亡が伝わった。同日、大城和恵さんのエベレスト登頂も伝わった。彼女のコメント「前略、絶対に下山でミスをしてはいけないぞ!生きて還るまで、気を抜かないようにしましょう」いや、この心意気あればこそ。

ヒマラヤだけではない。広島支部の幌尻岳の事故や新潟のあの親子だって下山を誤った。我々も下山を誤らないようにしましょう。

わが山登りと東海支部 その3

元・常務委員(支部報担当) 安藤忠夫

『名古屋からの山なみ』には市販本のほかに限定50部の特装本がある。背皮装、表紙の平(ひら)には、私の生まれ故郷で産する足助木綿を使った。素人ながら、織りから染色に至る総ての工程に関わって、職人の仕事を手伝いながら仕上げたものである。挿入した肉筆画は、杉田博、筒井 稔、妻藤寛史の各氏と私を加えた四人で、手分けして描いた。1冊に3点を入れたからこの世界では豪華本の類だろう。頒価1万9千円。いくらかの利益を出し、普及本の印税と子ども支部の活動費に回すことができた。

はじめて手掛けた山書が好評だったことに力を得て、その数年後に『名古屋周辺 山旅徹底ガイド』の正編・続編(正編初版・1995年12月、続編1996年3月、中日新聞社・刊)に取りこんだ。紹介した山は248山、支部員を総動員したもの。なお、挿入した概念図は、支部員の塚本義次さんが代表を務められていたマック出版によるものである。

まず、前記の『名古屋からの山なみ』にもまして、多量の山を扱っていて、しかも、ガイド書だから机上の作文だけでは事足りない。執筆者には、当時発足したばかりで登山をはじめて間もない支部友の方々にも担当してもらわざるを得ない。だが、その山が何処にあるのか、登山口がどこか、どの程度の難易度の山なのかも判っていない方もおられる。で、やむなく山の案内をかって出たことも再々。中には一日のうちに、三つの山に韋駄天のごとく付き添い登山をしたこともある。

また続編の編集作業中でのこと、当時、私が使っていた入力用器械は「書院」と称するワープロ専用機だった。優れものではあったが、記憶容量が小さく、メーカーが唱えるほどには使い勝手はよくなかった。案の定、入力作業の大詰めになった段階で操作を誤り、全てを失ってしまったことがある。

何日も徹夜をしながら、集まってきた原稿を統一した形式に直し終わって、ホッとした矢先だった。一冊まるごとである。約束した筆者への送り返しや、出版社への持ち込み期日が迫っていて、お先真っ暗。見かねた職場の数人が、

再度、手分けして入力作業を手伝ってくれた。何事もというか、最後の下駄を履くまで何がおこるか分からない、という教訓である。

他にもある。無けなしの時間をやりくりして、現地まで行って必要な山の山容を撮影し現像に出した。ところが、あるうことか機械の操作ミスでフィルムが途中で切断され、漏光が入ってしまったという。撮影したすべてのコマが使い物にならなくなった。唾然、口が塞がらず、怒り心頭だ。背に腹をかえられず、写真屋に現地まで再撮影に行ってもらい、なんとか辻褄をあわせた。さぞかし、途方もない無理難題を言い出す客だ、と思われたことだろう。

支部の出版物として私が手掛けたものに、ほかに『東海山岳』の6号(1994年2月)、7号(1996年9月)、8号(1999年6月)もある。うち6号は当時副支部長の任にあった鈴木常夫さんの助けをうけて成った。この『東海山岳』について語ると長話になりそうなので、ここでは触れない。という云うことで、支部の出版物を都合6冊手掛けたわけだが、今では、よい勉強をさせてもらったと思っている。

なお、ここまで記してきた出版物のそれぞれの場面で、現支部員の水畑靖代さん、樋口悦子さん、そして故・山本紀子さん、その他大勢の方々にお世話になったことを記しておかないと、片手落ちというものだろう。

支部報を担当するようになったのは、先に触れたガイドブックの編集途上のころからではなかったか。1993年5月発行の50号から1995年4月の59号までの、前後2年間10回だった。さきに触れた『名古屋周辺 山旅徹底ガイド』の編集作業を抱えることになって、後任の高田真歳さんに引き継いでもらった。

その頃の、消化しきれなくなっていた仕事量の多さの訴えを「支部員・支部友を合わせると約300名。会が盛況であることは喜ばしいことである。これだけ多人数になると各種行事が多くなって、企画立案、文書作成、発送作業など、その一つ一つの事務量も歴大なものになっている。事務局を支える者数名、時には本職を放り出して作業をしないと消化できない。パンク

寸前といったところ。どなたか、手助けしていただける人、いませんか」(支部報50号所載)と、悲鳴を発しておいたお陰だったのだろう。

支部報は、私が前任者から受け取った頃までは年間三回ほどの発行で、不定期に近いものだった。ちょうど支部友制度を導入した時期とも重なり、支部の活動報告ばかりか、山行計画の通知とその報告をする機会が多くなったので、毎号30頁余、年四回の定期刊行とした。それに伴い、支部費の値上げをしなければならなくなってしまい、現在の3000円に値上げを計った犯人というわけ。

じつはその支部費の支払いについても、毎月支部の会議に参加している役員の中にも支部費の支払いが滞っている人があって、請求すると1万円札を叩き付ける人があったりした。これなど、今とは違って、当時の笑えぬ支部の懐深い(?)体質によるものだったようだ。

さらに一つ。支部の表札造りがある。本来、この種の作業となる彫刻は、私に心得がなく、素人である。だが、周りにそれらしきことの出来る人がいなかったので、やむなく、私に白羽の矢が立ったのである。

日本山岳会東海支部のルームを、名古屋市中央区富士見町のOCMビルの一画に得た時だった。オーナーの、当時支部長だった尾上昇さんの要請によるもの。50×150㎝ほど、材質はトチ。材木を調達するのに飛騨の上呂まで行った。ノミと彫刻刀で仕上げるのに、冬休みを使い1ヶ月ほどかかったように思う。これはその後10数年、ルームの入口正面に掲げてあったが、なにせ雨ざらしだったので、朽ちてしまい、今は金属製のものに替わっている。

またそれとは別に、本部へ寄贈された山書のうち重複図書を支部へ移管することになって、その選定のために泊まりがけで、本部へ出向いて行って選定作業に当たったことがある。

ルームの書架のスペースを思いうかべながら、選択の基準を、稀観本に類するもの、状態のいいものをうづ高く積まれた山書の中から選びだした。その時受け取ってきたもの(その

一部を支部報55号、56号で紹介)が、現在の、支部の基本図書となっている。その後、毎年行われる年次晩餐会の行事、図書交換会につながっている。

一方で、支部の活動拠点としてルームを得たことで、役員会や各種の行事が定期的に行われたり、座談会(一水会?)をもってルームライフを愉しむようになった。

記憶にあるのは、橋村一豊氏主宰のワインパーティー。ほかに、後に支部長を務められた寺西申生さんが、ある禁猟獣の肉(特定すると世間に憚れる)を手に入れてきて、味見をしようとするようになった。もちろん、私も相伴になった一人、けっこう美味かったが、当時も今もその獣猟はご法度のはず。それを支部ルームで食するのだから、やっぱり佳き時代だったのだろう。

そう言えば、先に触れた萩徹さんは、当時愛知県警の現役の辣腕警察官で、1994年に行われた「わかしゃち国体」の準備段階時に、2人の若い山好き警察官とともに入会された。登山を趣味とされている皇太子殿下が出席されることもあって、支部役員らの素性あらためだろうとうわさしあったものだった。実は山登りの趣味が高じて入会されたはず。私もこの国体には実施期間中ばかりか、その前後1ヶ月近く張りつけになってしまった。

とはいえ、私とはけっこうウマが合った。で、ある時、ヘリコプターで秋の裏剣、仙人池・池ノ平周辺の探訪を相談したところ、当の萩さんは、富山県警のしかるべき人を介して、みごと実現されたことに驚いてしまった。県警内での実力のほどを垣間見たものだった。

さらに同じ頃だったが、関西電力の社員にお世話をいただいて、宇奈月から工事用車輛に乗って、高熱隧道を抜け、黒四発電所からダムに至り、大町まで駆け抜けたこともあった。

山岳会に集う人たちは海千山千の者ばかり。それもこれも、よき時代の仲間だった。

いくらか脱線したようなので本論にもどる。

ある時、亡くなった徳島和男氏が、せつせと支部友会員のお世話をしている私を見て、「よくやるねえ。自分は年寄りの世話なんかできそうにない。若い人たちの面倒をみる方が楽しみがあるから」と、独り言をいうようにフツと漏らしたことがあった。(次号に続く)





東海支部の蔵書からの一冊⑩

図書委員会委員長 石田文男

『ヒマラヤ名著全集』全12巻

今回の支部蔵書紹介から方針を転換する事にした。それは従来のみだと1回に2点、年4回でもせいぜい10点までで、貸し出し、禁貸を合わせた全量の相当分を大まかに紹介していくにも限りがなく、また容易いことでは無いかからだ。こうした観点から1回毎に3～7点を紹介していこうというものである。そんな中から1冊でも多く興味をもち、あまつさえ会員の山登りの糧になればと思うのがその目的にある。

〈『日本百名山』にしても『ヒマラヤの高峰』にしても、編集者の努力で出来上がった本と申しても言い過ぎではありませんまい。・

・毎月毎月担当の編集の方はどんなに苦労されたことか、私が一番よく知っております。辛抱強い催促があったからこそ本が生まれたのでした。自慢出来る事ではないのですが、毎月25日の締切日までにお渡ししたことは長い年月にただの一度もありません。月末までに書ければまだ良い方で、翌月になることも度々でした。それを毎月休載しないためにはさぞ骨を折られたことでしょう。傍で暮らす私は「申し訳ありませんが、もう一日お待ち下さい」と電話で詫げるのが役目でした。そんな時自然とつらそうな顔になるらしく、『お前は編集者の見方だからな』とよく主人に皮肉を浴びせられました。・・・やっとな終章に漕ぎつけて、もう僅かと言うところで主人は急逝・・・そのあとを吉沢一郎氏が引き受けて下さいました。・・・〉このくだり、深田久弥の日常・夫婦の生活を有りのまま語られていて何とも微笑ましく読める。

引用が長くなってしまったが、これは第4巻『ネパールヒマラヤ』の月報「原稿のこと、本のこと」に述べている深田久弥夫人の一部分で、久しぶりに目にして改めてこの全集、ことに『ネパールヒマラヤ』をはじめ数多のヒマラヤ、中央アジア、西域探検紀行を改めて日本国内の世に紹介した人物「深田久



弥」に感銘したものだ。

さらに、この『ネパールヒマラヤ』の解説(諏訪多栄蔵)の一節を引こう。〈深田さんは、1958年ヒマラヤ探査行に出かけられた。直接の動機は・・・ジュガール・ヒマールを歩きたかった。ティルマンと同じようにゴザインタンを眺めたいという気持ちがあった(深田さんはガンジャ・ラで薬師岳のような山を見たいといい・・・)。その後、ジュガール・ヒマールの最高峰ビッグホワイトピーク(7083m)は全日本山岳連盟の・・・第3次隊によって初登頂。ガネッシュ・ヒマールは堀田隊が・・・。ランタン・ヒマールは、飯田隊、大阪市大隊、田村隊と続く。この種まきは深田さんである。

またアンナプルナ4峰とマナスルもティルマンが手をつけ注目した・・・。マナスルは今西錦司さんの綿密な踏査偵察により、日本最初の8000メートル峰となったのは・・・。つまりティルマンの『ネパールヒマラヤ』は、日本のヒマラヤ遠征のテキスト・ブックとなり・・・ティルマンの踏査を最も忠実に踏査し・・・今日の日本のヒマラヤ登山の発達に寄与したと信ずる)が、正しく未踏とバリエーションを連綿と求めさせてきたのだと思うと、とくにヒマラヤに関する本は興味を引き読者を引きずり込むのだろう。

合わせて、前号で紹介した『ヒマラヤの高峰』から符号するようなところを再引用して

みた。〈深田久弥はその雪華社版『ヒマラヤの高峰』をまとめるにあたって、《原稿をほっぽらかして、私のヒマラヤ放蕩が始まる。・・・》その放蕩が登山と探検を志す若者たちにヒマラヤ熱をふきこんできたことは事実である。彼は研究者、祖述者であつたばかりでなく、ヒマラヤの扇動者であつた。

この点、『ヒマラヤの高峰』の果たした役割は絶大なものであつた。・・・数年もたたぬうちに民間団体や小登山隊が成果をあげ始めたのは、深田のヒマラヤ記事による煽動があつたからにはほかならない」と。

今ここに、山の本の何ぞやの蘊蓄を言ってみても「本を読むことが山に登る事に何の意味があろう」。地図すら持たず山を登っている、これが現実だと出くわすことも多い。そしてヒマラヤも今日では観光・トレッキング化しているところもあり、「改めて古臭い本など読んで何の・・・」と思われるかもしれない。

しかし、山はその人の山に向かう想い一つである。ヒマラヤなど高い山も国内の山を登るのも。

この全集は次のとおりである。

- 1、「ヒマラヤの謎の河」
ベイリイ著／諏訪多栄蔵・松月久左訳
発行：1968年5月20日 頁397
- 2、「カンチェンジュンガー一周」
フレッシュフィールド著／薬師義美訳
発行：1968年9月30日 頁340
・シッキム・ヒマラヤ美の発見
・ヒマラヤ探検史上に輝く名作
- 3、「エヴェレストへの闘い」
ノートン著／山崎安治訳
発行：1968年4月30日 頁352
・エヴェレスト登山史上最大の謎
・初期北方ルートを巡る生と死のドラマ！
- 4、「ネパール・ヒマラヤ」
ティルマン著／深田久弥訳
発行：1971年9月20日 頁328
・ティルマンの古典的名作
- 5、「無名峰の聳える国」
ティッヒー著／福田宏年訳
発行：1968年7月20日 頁341
・西ネパール初横断の記録
- 6、「神々の御座」
ハイム／ガンサー著／尾崎賢治訳
発行：1967年10月10日 頁356
・カイルス周遊とガルワール踏査
- 7、「ヒマラヤの5か月」
マム著／丹部節雄訳
発行：1963年10月31日 頁225
・名峰トリスル初登頂、英国隊の記録
- 8、「ナンガ・パルバート登攀史」
パウアー著／横川文雄訳
発行：1969年7月25日 頁463
・発見から試登・遭難・初登頂まで
- 9、「カラコルムの夜明け」
コンウェイ著／吉沢一郎訳
発行：1968年10月5日 頁482
・ヒマラヤに新時代を画した歴史的な名作
- 10、「地図の空白部」
シプトン著／諏訪多栄蔵訳
発行：1968年3月30日 頁304
・幻のシャクスガム溪谷行、小遠征隊論を高揚するシプトンの記念的名著
- 11、「ティリチ・ミール登山」
ノルウェー隊著／吉沢一郎訳
発行：1968年7月5日 頁354
- 12、「カラコルム登山史」
ダイネリ著／河島英昭訳
発行：1970年12月15日
・カラコルム登山史の決定版
別巻1「ヒマラヤ巨峰初登頂記」
ファンティン編／牧野文子訳
あかね書房 A5版
編集：深田久弥・諏訪多栄蔵・吉沢一郎

この全集を手にするにあたってはまず、それらの原著者の序文、解説と訳者あとがきから読むようお勧めする。原著者の山に向かう姿勢、訳者の思いを込めた流れ、訳者の原書に対する意気込み。このあたりを掴んでいれば全体像が分かるのではないだろうか。

つい次数がかさ張り、この1点の紹介になってしまった。



同好会紹介コーナー

スケッチクラブ

村中征也

あんずの里スケッチ旅行

4月11日(水)～12日(木)、長野県千曲市のあんずの里へ11名でスケッチ旅行に行ってきた。



あんずの里展望台にて

皆さんは「杏子アズ」をご存じでしょうか？ヒマラヤが原産地の梅・桃・スモモなどと近縁の果樹植物で、中国では「唐桃」と呼び、紀元前3000年既に山岳地帯で薬用として栽培されていました。花期は4月上旬で、淡いピンク色の花を付け、6月中旬に橙色の果実をたわわに実らせます。

キッカケは、百人一首の藤原実定の別歌「月見ればはるかに思う更科の 山も心のうちにぞありける」から。「更科」は段差のことで、千曲市の地区名です。また漂白したソバの実のことも言い、松尾芭蕉の『更級日記』はここから命名されています。

千曲川を挟む西側の段丘は、棚田を形成して「名月の里」として有名で、東側の丘陵に杏子畑が広がっています。バックの高妻山・飯縄山が雪を冠ぶり、可憐な花が広がる風景が郷愁を誘い、長年の夢でした。

ところが最近の暖冬で花期は1週間早く、咲き残った花を探して絵筆を取ったが、参加者には申し訳ない思いです。

宿泊は、上山田戸倉温泉の「山風荘」。温泉・料理・もてなしのどれも素敵な宿で、山とは違ったクラブライフを楽しめました。また、天候の都合で初日に訪れた上田城も、門と櫓と残りの桜に「真田丸」を偲び、十分楽しめました。

夏場は、東山植物園・津島市天王川公園など近隣のスケッチです。「試し参加」も出来ます

ので、気軽に声を掛けて下さい。

代表…石田好子

事務局…村中征也・武内喜代子

古道塩の道同好会

山中光子

色々と詳しい情報を得て、すっかりお世話になった箕輪町を抜け、辰野町に入る。

古道塩の道に関心の高い市町村の役場の人は、ご自身で調べてくれたり専門家を紹介してくれたりで、素人の私達にとってその土地の知識に大きな違いが出てくる。

辰野町に入ってからしばらくは、旧街道として153号線の歩道を歩ける。ところが飯田線の羽場駅と伊那新町駅の間当たる、荒神山温泉への案内板の出ている辺りは歩道とは名ばかりで左右の足を前後に揃え一列に歩くだけの道幅。他に逃げ道が無く下見の時にとても怖い思いをした。皆の安全を考えて、そこのみ車で通過してもらおう。

伊那新町駅を通過したあたりからは、歩道も完備され安全に歩ける道となる。町の中の庭先の生垣に隠れた、じゅうりん塚には廃仏毀釈で首を切られた地蔵さんが建ち並んでいる。切られた首にはペンキ。各所に散らばっていた石像を一カ所にまとめた様子。



そこから鍵の手になり右折。153号線に戻るまでに、一般的には名も知られていない静かな「宮木諏訪神社」がある。清掃がきちんとされており、ひきよせられるようにお参りさせてもらおう。「一之御柱」と表示された御柱。さらに多数の御柱が並んでいた。神社本殿も立派に建っているが、

宮木諏訪神社 一之御柱 まだその奥の山へと神殿が続いていた。住宅街の中にも関わらず、草刈も完全にされており氏子さん達の努力が見られる。

神社に別れを告げ、鍵の手になった旧道そのまま進むと、新しく立て替えた家にも関わらず「問屋」の古い標識が表札と並んでかけてある。その2軒ほど先には年代を感じさせる2階建

ての建物には「高砂屋」の看板がでている。窓も障子張りなのでかなり古い建物と思うが、聞くすべも無く通り過ぎ車の多い153号線に戻る。

その後智児神社等を過ぎ、徳本水の水くみ場の看板を目印にして旧道に入る。車の騒音からしばらく離れ、山沿いの旧道らしい道を進む。少し先には「山の腰道」と表示された看板。先ほど国道沿いにあった、智児神社から龍ヶ崎公園への山道案内があったが、草茫々の道で今は誰も歩かないような道だった。

水汲み場には多数のペットボトルを持ち、水を汲んでいる人に出会う。皆で賞味させてもらうがくせのない水だった。徳本上人の慈悲のこもった石清水との事。周りには三十三観音が並び馬頭観音等の石像も並ぶ。山の上には昔は茶店もあったの事。先へ進むとかなりの石像が所々に並んでいる。この山沿いの旧道は、広い範囲の至るところに石像が並び、信心深い集落だったよう。



「徳本水」と今村の信仰遺跡

公民館等を過ぎ綺麗に咲いた花々を眺めながら先へ進むと、「十一面観世音菩薩」と石碑の立った観音堂へ出る。鎌倉末期の観音像で国の重要文化財に指定されている。観音像は大正・昭和の地元の大火時には住民に運び出され、難を逃れたと言う。一般公開は年2回のみ。観音堂からしばらく用水沿いに歩くと、また153号線に出る。この先はまた別の集落に入り楽しく歩く事ができる静かな旧道が続く。

東海支部俳壇

山蕩児 心酔

鯉のぼりに三句

春風にさも楽しげな親子鯉

尾を下にしやしやすらう鯉のぼり

春の空君を重ねし女夫鯉

今年も和田山に行く

残雪を継ぐかなたに野伏ヶ岳

斑雪山逆さを映す地塘かな

和田山のうぐいすケキヨとだけ鳴けり

蕨突破雪解の水の旨さかな

五月仕事で鉦路へ

野遊びも半袖寒し鉦路かな

鉦路まだストーブを焚く五月かな

君恋ふるぬさまい橋の春夕焼

◎弊舞橋…世界三大夕日の一つといわれている鉦路の名所。見る者すべてをロマンチックな気分させるという。

追悼句

西山秀夫

3/14 大坪重遠氏88歳で死去
亀鳴くや見事天寿を全うす

3/13 湯浅道男先生死去
ヒマラヤの峰に召されよ暮の春

霞む山猿投折平三国山

畑打つや道を問うても顔上げず

3/20 山岳会の写真展初日
一堂に会す三月の写真展

3/31 恵那SAにて
恵那山の天照らすごと春満月

安曇野の仁科三山(爺ヶ岳、鹿島槍ヶ岳、五竜岳)
朧夜に仁科三山しろじろと

3/1 梅池スキー場から白馬乗鞍岳
スキーヤーもポーターもみな春スキー

春雪嶺這松雪に顔を出す

白馬岳の黒き巖や春の山

3/5 尾鷲市の川端守氏から恵贈
春の夜や黒潮の香が漂へり

キンランの黄金色した花が咲く

吉祥山聞き耳たてし初音かな

支部友コーナー

◆支部友委員会山行計画

(平成30年9月～11月分)

- 9月15日(土) ☆☆
 山域：伊吹山地 山名：伊吹山
 リーダー：村瀬恭平 締切：8月25日
- 9月17日(月・祝) ☆
 山域：高見山地 山名：倶留尊山
 リーダー：水野猛志 締切：8月27日
- 9月22日(土) ☆
 山域：布引山地 山名：経ヶ峰
 リーダー：田中 進 締切：9月2日
-
- 10月7日(日) ☆☆
 山域：飛騨南部 山名：白草山
 リーダー：高松信治 締切：9月15日
- 10月13日(土) ☆
 山域：八ヶ岳 山名：ニュー
 リーダー：今津英一朗 締切：9月23日
- 10月20日(土) ☆☆
 山域：奥三河 山名：宇連山
 リーダー：榊 将美 締切：9月28日
- 10月27日(土) ☆
 山域：中央アルプス 山名：南木曾岳
 リーダー：村瀬恭平 締切：10月10日
-
- 11月3日(土) ☆☆
 山域：鈴鹿 山名：竜ヶ岳
 リーダー：高松信治 締切：10月13日
- 11月4日(日) ☆
 山域：中山道
 山名：福島宿～鳥居峠越・奈良井宿
 リーダー：金谷正起 締切：10月15日
- 11月24日(土) ☆
 山域：養老 山名：養老山
 リーダー：田中 進 締切：11月4日
- 11月25日(日) ☆☆
 山域：美濃三河高原
 山名：各務原アルプス縦走
 リーダー：水野猛志 締切：11月5日

支部友会員数

平成30年5月末現在 / 111名

次回支部友ミーティング

開催内容のお知らせ

- ① 第31回「地図の読み方」パートII
 日時：8月7日(火) 19:00～21:00
 講師：今津英一朗氏・高松信治氏
 ＊コンパスをお持ちの方はご持参ください。
- ② 第32回「朝明ミーティング」
 日時：9月29日(土)～30日(日)
 内容：1日目バーベキュー・キャンプファイヤー等の懇親会 2日目分散登山

山行対象者 支部友会員及び支部会員

- 申込み方法** ・支部友会員は申込締切日までに、各山行リーダーが示す方法で申し込む。
- ・締切日 原則山行日 20 日前まで。(締切日を過ぎての参加空き情報はリーダーに直接問い合わせ下さい)
 - ・支部会員は申し込み締切日の翌日以降に、各山行のリーダーへ問い合わせる。
 - ・山行の募集人員を超えない範囲で、支部会員の参加申し込みを受け付ける。

リーダー連絡先

尾上 昇 FAX：052-832-3878
 メール：onoe@onoe.co.jp

金谷正起 携帯：090-9931-3600
 メール：kanaya.masaki@rouge.plala.or.jp

榊 将美 携帯：090-7237-4410
 メール：m.sakaki@minds-consulting.jp

村瀬恭平 携帯：090-4186-9876
 メール：hoshizakari@ezweb.ne.jp

田中 進 携帯：090-9191-8666
 メール：t-susumu@peace.ocn.ne.jp

今津英一朗 携帯 090-2616-7549
 メール：imazu.eitirou@maroon.plala.or.jp

磯部 隆 携帯：090-9180-7245
 メール：takass@yk.commufa.jp

高松信治 携帯：090-3156-5268
 メール：takama2nobu3@yk.commufa.jp

松本陽子 携帯：090-7859-4031
 メール：yo-kom@nifty.com

水野猛志 携帯：090-5866-3781
 メール：r34668@bma.biglobe.ne.jp



追 悼

湯浅道男先生を偲ぶ

支部長 高橋 玲司

良くやった、ありがとうみんなの成果だ！

シシヤパンマベースキャンプでトランシーバーを片手に男泣きに叫ぶ湯浅道男先生の姿が忘れられない。1989年の愛知学院大学シシヤパンマ登山隊の隊長の湯浅先生である。

これが湯浅先生のすべてであろう。自身の事より、仲間を愛し、仲間を育て、仲間以上に感動する涙もろくも人情味あふれる姿が、湯浅先生である。

私にとって先生とは湯浅先生ただ一人である。今までもこれからもである。高校時代に尾崎 隆さんの本を読み、感銘を受け数ある大学から先生を師と仰ぎたくて、愛知学院大学山岳部の門を叩いた事を思い出す。

先生は、「人間の能力には差は全くない、愛知学院だからって引け目に思ふな。おれたちは日本一の山岳部であり、プライドと自信を持って行動しろ」そう先生から何度言われたことであろうか。学生時代は先生の独特の持論のもとに徹底的に鍛えられ、何より人としての生き方を熱く語られ人間味をむき出して育てていただいた事が忘れられない。何度叱られたであろうか。そして何度考えさせられたであろうか。しかし、次の瞬間更には翌日、にこりと笑われるとその叱られた意味が理解できるのである。

時には涙して語っていただいた事もある。そして何事もなかったかのように又山へと向き合うのである。そんな人情丸出しの先生の周りにはいつも若い人で溢れていて、いつまでもいつまでも先生の話に聞き入り、そして一人の人間として、登山家として全員が成長していったのである。夜遅くまで話し込み、その後先生も徹夜で仕事をされるなど、激務の中にも学生や山に集う若者に真摯に対応され、むしろそれを楽しみにされていると思うほどであった。

先生は現在の文登研(文科省登山研修所)の設立にも尽力され、当時一匹狼的な精鋭クライマー達を束ね、登山界の発展のための指導者を育成し、現在の日本の登山技術の向上と平準化に大きく寄与された。また、ガイド協



湯浅道男氏

会の設立など現在のプロガイドの礎を作ったのも知られている。

先生の登山歴はご存知の通り、第二次RCCの一員としてドリユ北壁日本人初登などクライマーとしての実績もあるが、特にエベレストの隊長を3回も努められたのが特筆されよう。また東海支部でもガウリシャンカール峰の成功など数々の遠征を通してヒマラヤニストを育て、多大な功績を残して下さった。自身の事ではなく、隊を通して人を育て、隊を成功裏に導く手腕は、生まれつきの資質であろう。その影響であろう。湯浅門下からは、人間味あふれる人間として魅力のある「人」が多勢育っているのである。先生にお世話になりチャンスを与えて貰った人も数多い。人をしっかり見て、的確にその人に機会を与えてくださっていた。

あるとき先生はこう言ったことがある。「我々は普通の人より山登りという趣味を一つ余分に持っている。これは大変すばらしいことだから捨てる事はない。人よりもひとつ余分に価値を知っているのだからこれは幸せなことだ。だから先ず仕事や実生活をきちんとやるのが当然の事で、きちんとした上で山に向かう事こそが大切だ。私自身も実際にやってきたし今後も変わらない」。いかにも湯浅先生らしい律儀さである。

晩年の先生自身の山登りは非常に穏やかで、楽しくのんびりした山登りをしていた。時には、若者に夜遅くまで囲まれ、その後に夜を

明かして仕事をされるなど激務のせいで、いつも疲れられておられるご様子であった。それでも皆に囲まれながら談笑、暇をみつけられては山も登られていた。

先生の残された功績、それは何より人を育てられたことである。それを知っている者一人一人の心にそのことがしっかりと刻まれており、今先生とお会いした頃の先生と同じ年齢が近づくと、つくづくと感じるのである。先生の生き様を見てみると改めて自分自身の未熟さを知る思いである。今もきっと黄泉の国から我々をじっと見つめ、はらはらしながら、一喜一憂されていることであろう。これからは、先生から受けた教えや御恩を胸に、先生に恥じない生き方をしなければならぬことを誓い、このことを御霊に捧げるものである。先生本当にありがとうございます。どうぞ安らかにお眠り下さい。

湯浅道男先生の経歴

1937年千葉県生まれ 早稲田大学法学部卒業
法学博士 愛知学院大学法学部教授 法学科
長 日本山岳ガイド連盟副会長 愛知県山岳
連盟会長 日本山岳会東海支部支部長など
を歴任
1963年ドリリュ北壁日本人初登 第二次RCC
1966年JAC入会(東海支部) 愛知学院大学法学
部赴任
1968年コー・イ・バンダコール登頂 愛知学院
大学隊長
1973年エベレスト南西壁 第二次RCC隊 隊長
1977年ブロードピーク第二登 愛知学院大学
隊隊長
1984年ガウリシャンカール峰南峰初登 JAC東
海隊 隊長
1988年チョモランマ登頂 日中ネ三国合同登
山隊 南側隊長
1989年シシャパンマ 登頂 愛知学院大学隊
隊長
1994年エベレストサウスピラー登頂 愛知学
院大学隊 隊長
2018年4月13日 永眠 享年81歳

.....

湯浅道男先生を偲ぶ

常任評議員 尾上 昇

湯浅先生の訃報に接したのは、お亡くなりになられた当日の4月13日、海外の出張先でのことであった。そんな訳でご葬儀には参列できず、返す返すも申し訳なさで一杯である。

私と湯浅先生は、1966年(昭和41年)の夏を過ぎた頃、共に東海支部の一員に加わった。先生は、東京から愛知学院大学法学部の講師として赴任。私は、東京から帰省。同期生になる。ただし年は、私の方が5つ若い。

爾来、先生には5~6年程前に体調を崩されるまで常に支部運営の中核としてご活躍いただいていた。支部創立60周年を間近に控え半世紀近く支部の発展にご尽力賜ったことを、支部を代表して衷心より御礼申し上げたい。

先生との思い出を、との支部報の編集者からの原稿依頼である。ところが、思い出は余りにも沢山あり過ぎて何を記したらいいのか正直とまどうばかりである。

私とは、5つ違いであるが、お互い若さをぶつけ合い、支部運営、海外登山と毎日のように熱い議論を交わしていたことが、今となってはなつかしく思い出される。時には、口角泡を飛ばし、夜中まで議論を闘わせたこともあった。いつぞやは、私の独断専行に激怒され、声を荒げ大声で叱責を受けたこともあった。もともと、お互い直情型なので誤解、曲解も手伝っていて私も負けてはいない。しかし、これらのことは、お互いが真摯に支部の為を思っている事で、他意や悪意があるわけではないので、事が収まれば、元の鞘に収まり禍根は残さないのである。

今にして思えば、5歳も年下の私が、対等に議論を吹っ掛けたり、勝手な行動で不愉快になられたり、生意気な奴だと思われていたに違いないと思うと、汗顔の至りと言うほかない。

私と湯浅先生が東海支部に加わった頃の支部は、アコンカグア南壁の遠征を終えたばかりであった。支部では、ヒマラヤ登山禁止令が発令ということもあって、次の計画が頓挫、一段落といったところであった。それでも支部ルームは、ヒマラヤを夢みる若者達が集い活気に満ち溢れていた。

1968年、ネパール政府がヒマラヤ登山解禁

を発表。この報に一気に支部は湧き、1970年念願のマカルーに登山隊を送る。東海支部隊は、マカルーの南東稜初登攀を手中に収める。

その後の東海支部である。暫く時を置いて、1975年カラコルムのラトック、1976年のパミールへと登山隊を派遣した。そして、1980年のガウリサンカール計画へと続く。

しかしである。1970年からの10年間の支部は、いささかエキセントリックな時代であったと位置付けなければならない。1970年以後の支部運営は、マカルーの実質的な推進者であった原 真さんが握っていた。原さんは、独自の持論を展開、海外登山を中心とする独断的な支部運営を進めた。これに人は、次々と去り、通常の支部運営が麻痺、休眠状態に陥る。

いくらなんでもこの状態は拙いと、これに異を唱え改革を迫ったのが、湯浅先生や中世古隆司さんを中心とするいわば良識派の台頭であった。これに原さんは猛反発、ついに業を煮やし支部解散論を持ち出し、本部に解散届を出すと言い出したのである。

これには驚かざるを得ない。支部存続の危機である。ある夜、中世古さんが、ルーム(原さんの経営する原病院の地下室)から、印鑑を初めとする支部の重要書類を秘かに持ち出し、即刻本部に支部ルームを中世古方に移管したとの届けを提出したのである。

これには、さしもの原さんも引かざるを得なくなる。原さんも黙って引き下がるのには、腹の虫が収まらなかったのであろう。空席となっていた次の支部長に「湯浅や中世古の就任は、断じて許さない」と怒りを顕わにしたのである。その妥協案として支部長に推されたのが私であった。原さんとは、マカルーで苦労を共にした仲ではあったが、その後の原さんの独断的な支部運営には、苦々しく思っていたので、一線を画していた。

原さんも息の掛かった尾上ならと妥協したのであろう。湯浅先生や中世古さんの後押しもあって私が、東海支部の第5代支部長に就任したのである。とんだクーデター劇である。

原さんの去った後の東海支部である。尾上が馬となり二人の馭者に操られながら直走る。二人の馭者とは、言うまでもない。湯浅先生と中世古さんである。それ以降の東海支部は

というと、周知の通り黄金期を迎え、全国33支部の中で最も活気に満ちた活動の盛んな支部として発展していったのである。

東海支部を去った原さんは、自ら「高所登山研究所」を立ち上げ、高处登山における原イズムを実践。日本の登山界に新たな境地を開き一石を投じたことは、高く評価されよう。

借しむらくは、原さんには支部の中に、例えば「高所登山研究委員会」のようなものを設置して、支部活動の一環として活躍して欲しかったと思っている。しかし、それを原さんに求めても恐らく受け入れなかったであろう。一応支部を追われた立場。自尊心の強い原さんには、許しがたいことである。原さんの原さんたる所以である。支部としても労苦を共にしてきた原さんとの別離は、いうにいわれぬ寂しさがあったことは、いなめない。

東海支部の今日までに至る過程には、このような波乱的一幕もあり、いささかオーバーな表現ではあるが、これはそれを動かしてきた男達のドラマでもある。その男達、原さんも湯浅先生も中世古さんも、今はいない。私一人になってしまった。そろそろ私も黄泉の国への旅立ちへの支度をせよとの先輩達のご託宣なのであろうか。この際、生意気ついでに先輩諸兄にもう一度、論戦を挑みに行ってみることにしてみるか、と思ったりしている。

大坪重遠さんを悼む

編集委員 西山秀夫

平成30年3月14日に大坪重遠さんの訃報を聞いた。昨年暮れにはキューバへ行ってきたばかりだった。享年88歳。

ブログに余命を予見

大坪重遠氏の令息の大坪五郎氏がブログ「大坪家の書庫」に父親の大坪重遠の部というコーナーを設けている。山登り、海外旅行記、エッセイの三部。そこからちよいとコピーさせていただく。目に留まったのは、2017/12/26の「癌の進行予測」と題した文だ。

「医師と相談の結果、ガンの状態と患者の年齢を勘案し、緩和ケアの方針とする。ガンの進行予測は、当然の関心事と言ってよかろう。この時点の予測は、義父の例から想像していた。2018年春、3~4月頃までは、通常活動、同好会、同窓会など出席、但し付き合い、

飲み食いなどは控えめに。その後は病院または自宅ベッド(希望)でいわゆる寝たきり。7～8月頃旅立ち」。

「2018/01/26は昨日朝のひげ剃りで、黄疸を認めたこと。食欲のひどい減退で、死ぬ前には食べられなくなるという生物共通の法則から、案外、早いのではないかと思うようになった。ただ、発病前から死ぬ要素は、交通事故から始まって、心筋梗塞、老人のインフルエンザなどいろいろあるので、何時何に会うかはわからないと思っているので特別心境の変化などはない。

従来通り“死ぬまで生きる。それまで好きなことをする”」。

絶筆

「2018/01/29は最近の食欲不振、気力の減退からみると、D点は意外に近く春先ではないかとも思うようになった。そこでこんな仮説を考えた。大抵のマラソンなどのフィナーレは進路に矢印があり、それに従って競技場に入り、一周してゴールするようになっていいる。ところが私は例のゴリ押しで矢印を突破、ゴールせず走り続ける。閻魔様が“おかしい。ひとり足らんぞ”。鬼“すみません、一人無茶なやつが矢印を突破しまして。すぐ手続きしてますが、国民番号も普及率10%なのではなかなか” キューバ旅行はそれではないか」。

これが絶筆となった。

仕事を離れて

仕事は、中部電力(株)の重役と仄聞していた。ブログの「仕事を辞めること」と題したエッセイには、1953年から44年間の会社員生活とある。この中には、中電を退職後、愛知時計電機の勤務も含むのだろう。

文中には専務、非常勤役員などの言葉がある。私との縁はこの頃だと思う。

上田クラブに集う

故上田正先生の自然発生的な集まりは「新ハイキング」誌で知り、当時は東海銀行に勤務していた菊田貞明氏に連絡をとって、私も誘っていただいた。この中に大坪氏も居られたのである。私のJACの会員番号は9600で84年12月の入会、大坪氏は9594で84年11月の入会である。菊田氏は9599で84年12月入会。つまり、同期生だったのである。クラブといっても会則はなく、年に2回から3回上田さん

宅に集まり、奥さまの瑞子先生のお手料理でもてなされて山を肴に気炎を揚げていたのである。

山の本が大好きな人が集まる

上田さんと大坪さんの縁は深田クラブだった。菊田さんは母体は東海銀行山岳部で、一等三角点研究会が縁である。

そんな折に上田さんは満を持して、日本山岳会への入会を勧めてくれた。私も一等三角点研究会会員として88年に『一等三角点百名山』(山と溪谷社)を上田さんらと共著で出版。大坪さんは深田クラブ編『日本二百名山』を共著で出版。入会後は東海支部では中日新聞社から『名古屋からの山なみ』を執筆している。大坪さんも書いているが、私どもは揃って書くことで結ばれたのである。

東海支部に新風を

東海支部というと、マカルーだの海外の高峰の遠征ばかりに血道をあげてきた先鋭的な支部である。ここに毛色の変った会員の入会で、少しは新風を吹き込んだのである。それは文字通り、東海支部の名前にふさわしい足元の山に登る活動のベースにもなった。

大坪さんの話に戻そう。平成6年には上田クラブで西山秀夫編『名古屋からの山旅』(七賢出版)を出版。

大坪さんは、湯が峰、五蛇池山、烏帽子山の3座を書いてもらった。文は人なりである。大坪さんは東北大学で電力論の講座をもっていた。つまり理系である。文章家ではあるが理系の人らしく、湯が峰では眺望と開発、環境保護と自然破壊と硬いカテゴリーで把握。五蛇池山では、「この辺りでは鉄塔と鉄塔の中間の高圧送電線に、棒のような絶縁スペーサーが取り付けられている」、春先の湿雪が電線上にたまって落ちた際、「下の送電線が跳ね上がり、上の線との間でショートする」から防止のためのものだ。との解説がある。山に遊んでいても片時も仕事のこと、ことに技術的なことを忘れることはないのであった。

烏帽子山は、「登り始めは暗い砂岩・泥岩であったが、この辺りでは赤石岳や山上岳と同じ赤い色のラジオリアが見られる」とあった。これはダム建設や鉄塔建設の基礎工事で地質調査で得られる知見であろう。かつて、「岳人」編集部から8ページを東海の山で書い

てくれ、と依頼があり、大坪さんには、冠山を書いていただいた。その文にも、山頂の直下の露岩のチャートは云々と、蘊蓄があり、理系らしいと思った。



豪雪地帯の沢に
軟弱な遊歩道が設置

よる遊歩道の工事のことだった。これはひどい、と思った。熊しかいないような深山である。そこはドウの天井という山の中に発電所を建設中だったのである。山をくり抜いて発電所を建設するために巨額の投資をしていた。

それは板取村の人を雇用し救済と言われた。一電力会社がやることではないでしょうと反論した。投資額は私どもの電気代に上乘せされるからだ。議論はそれ切りであった。言い過ぎたかな、と反省もした。ところが、その半年後の06年春、川浦水力発電所の建設中止のニュースに目が釘付けになった。私の言い分が聞き届けられたわけではないだろう。中



西ヶ洞で見た山中のトンネル

上田クラブでは環境についても議論白熱したことがあった。私が2005年奥美濃の三大名溪の一つである板取村の「銚子洞」を遡行した際に驚愕の自然破壊を目撃したことをメールで写真とともにお知らせした。トンネルと、銚子洞の手前からの鉄骨に

電の役員は降りているし中止させる権限などあるはずもないだろうから・・・。

しかし、大坪さんが現役に示唆したんではないか、と思った。谷の中は重役も知らないから写真で知れば驚く。

大坪さんは俳人でもあった。菊田さん編集のさすらい句集(第35回)から

“空蟬や今生の身は借りしもの” 重遠

・・・ちょうど10年前の2008年の御作。78歳の時の作品である。恬淡、無欲。

2015年1月24日に逝った岐阜支部の高木泰夫氏への追悼句として“雪冠る小津三山へかへるべし”を捧げた際に、大坪氏は、あの句は良いね、僕も(死んだら)あんな句を詠んで欲しいな、と言われた。

山岳会では35年の長きにわたって交誼のあった大坪氏への追悼句は「亀の会」に因んで

“亀鳴くや見事天寿を全うす”

春ののどかな昼、あるいは朧の夜に亀の鳴く声が聞こえるような気がする。亀は実際には鳴かないが、俳句の季語として親しまれている。生涯ユーモアを失わなかった大坪さんの霊に捧げたい。

.....

大坪重遠さんを偲ぶ

亀の会 加藤守彦

大坪さんは、亀の会の「希望の星」「目標」でした。

大坪さんは亀の会発足と同時に入会されました。78歳の時です。温厚な人柄もあって、「兄貴」というより「父親」を迎えた気持ちでした。「大坪さんの歳まで頑張りよう」と皆の目標になりました。当初は「傘寿(数え80歳)まで山歩きを楽しみたい」と願っていた亀の会の皆さんも、大坪さんが2009年簡単に傘寿をクリアされ、その元気をもらって、大坪さんを目標に励んできました。そして後に続く者もどんどん80歳の目標をクリアしてきています。満80歳を超える人が、大坪さんを筆頭に17名にもなりました。

目標は、米寿(数え88歳)に上がりました。大坪さんはこれも昨年クリアされました。米寿祝いの山は、888.8mの静岡の櫛立山でした。その昨年11月の仲間の傘寿のお祝いの山行が、大坪さんの亀の会山行の最後になりました。12月15日の亀の会忘年会には、最寄りの駅ま



櫛立山頂上888.8m (中央 大坪さん)

で来られたのに、体調が思わしくなく、戻られてしまいました。

大坪さんは、山歩きに関して多くの語録を残されています。印象深い2つを挙げます。
○こうして山歩きができるのは、自分の健康はいうまでもない。家族のお蔭。家族に病気など不都合があれば、山にも出かけられない。家族に感謝している。



急登を昇る 大坪さん(中央)

○昔日は、ロートルともなればロッキングチェアにくつろぎ、過去の栄光の登山を語ってい

れば、お迎えが来たものだ。しかし寿命が伸びた今はそうはいかない。重いキスリングを背負った颯爽たる姿は、夢の中で見ることにして、「おれは岳人」などというつまらない沽券など捨てて、その時々身の丈にあった山を楽しみたいものだ。

2011年深田クラブ発行の「シニア百山」鳩吹山より

大坪さんは、人生の終わり方も我々に示していただきました。

大坪さんは、「命は、自然の成り行きに任せる」という信念のもとに最期を迎えられたように思います。

奥さまからの手紙

「主人は我が道を行く人でした。会社を退職してから、健康診断を絶対にしませんでした。その結果大腸癌が肝臓に転移して、肝臓が手がつけられない状態になってました。そんな訳で、闘病生活は3ヶ月足らずでした」。

大坪さんからのメール

「小生もともと献体もしておりますし、今回の件もポンコツ車の修理費に何百万を投ずる人はおるまいと割り切っております。緩和ケアコースに入り、病状は見ているだけで何もしていません」。

御令息からのメール

父は、家族に見とられながら、静かに旅立っていきました。父は最後の瞬間まで「大坪重遠」でした。息子の私が言うのもなんですが、見事な最後でした。この10年間本当にありがとうございました。合掌

委員会報告

【亀の会】

亀の会は7月で発足10年を迎える

亀の会は7月で発足10年を迎えました。発足当初「80歳まで山歩きをしたい。」が目標でしたが、80歳の目標をどんどん乗り越え、「80歳は通過地点」に変わり、「88歳(数え歳)」が「目標」、「夢」になってきました。これも昨年、大坪重遠さん(故人)が達成され、米寿祝いの山行として静岡市の標高888.8mの櫛立山(けやきたてやま)へ行きました。「この調子で卒寿(数え90歳)も達成しよう」と話しあっていたほどお元気でした(残念!)。米寿祝いは、来年以降、毎年該当者が出ます。満80歳以上の人

は17人です。皆さん意気軒昂です。

「亀の会は終生自分の居場所だ!」を目指す

皆さん意気軒昂だ、とは言うものの毎年1年ずつ年齢が上がってきています。膝、腰、循環器系、呼吸器系の故障者、支障者も絶えません。加齢とともに、足腰の衰えも抗い難しく、耳は遠くなり、トイレが近くなってきています。それらを丸ごと受け入れた運営が要請されています。

「歩けるが山は厳しい」「皆のスピードには従いていけないが、歩きたい」の声が出てきています。このような要望にどう応えていくか、が新たな課題になってきました。

5月に高野山の町石道と高野三山巡りを実施しました。町石道は慈尊院(180町)から、根本大塔(1町)まで約20kmを歩く組と別に、矢立(60町)から大門(5町)までを歩く組も作りました。5.8km、コースタイム2時間を、草花を愛で、写真をと、途中昼食をとったりで、4時間かけて歩きました。達成感もあったようです。

こんな試行を重ねながら「亀の会は、終生自分の居場所だ！」を目指していきたいと思いません。

亀の会の年齢構成

・86歳～80歳	17人(男8 女9)
・79歳～75歳	13人(男6 女7)
・74歳～70歳	22人(男9 女13)
・69歳未満	3人(男2 女1)
計	55人(男25 女30)
・視覚障がい者 4人内数(全盲2人、弱視2人)	(2018年7月1日現在 満年齢)

亀の会 加藤守彦

【登山学校】

東海支部登山学校第Ⅱ期開校

—受講生の皆さんへ—

第Ⅱ期登山学校は平成30年7月7日に開校しました。第一部では平成29年度受講生の修了証書授与式。第二部では平成30年度受講生のオリエンテーション。第三部では日本山岳会元会長 尾上 昇氏による「近代日本登山史」—文明開化とともに—と題した講演。第四部では各クラスの担任と受講生によるカリキュラムの打合せを行い、いよいよ第Ⅱ期を向かえるにあたって皆さんの熱い思いがみなぎります。

初級教室4クラス23名、中級教室5クラス34名、上級教室2クラス13名、総数70名での開校です。

第Ⅰ期では受講生が自ら計画を立てて「自立した登山者」になることを指導の主眼としてきました。登山の危険と安全、危険防止のための登山の基礎的な知識や現地講習など、登山の基本について学んできました。

第Ⅱ期は受講生側の「意識の確認」を行い双方にとって有意義な運営を進めていきます。そこで、一部の方々に取材・アンケートをとりました。

Q) 登山学校に入校しようとした動機、目的、目標は何か? (多数意見記載)

A) ①今まで一人で山に登っていたけれど、もっと基礎から学びたい。②一緒に登れる仲間を

作りたい。③リスクを避ける術を学びたい。④知識・技術を得て自分で行ける山を増やしたい。
Q) 今後の登山学校に対する期待、要望は何か? (多数意見記載)

A) ①ロープワーク、セルフレスキューの確保技術習得の現地講習を受けたい。②岩登り・沢登りの基礎講習を受けたい。③他の班の受講生との交流がしたい。④初歩的なミスによる遭難事故が増えているなか、登山学校開校は意義深い、継続して欲しい。等の意見が聴かれました。

この事から、登山学校は思いの同じ人たちと一緒に学び合い、一緒に山に登り、登山の基礎知識・技術を学んでいただける最高の機関だと改めて感じました。登山学校はチームで学びます。目的のためのルールは自分たちで決め、ジャッジも自分たちで担うものだと考えています。ルールやジャッジが存在しないのではなく、受講生の皆さんがその役割も担っているのです。自分たちでルールを決め、自分たちで結果を評価するスポーツは登山において他にはないと思います。

第Ⅱ期は新しいクラスで、是非チームビルディングを行ってください。チームビルディングは、同じ一つの目標を目指し、メンバーが個々の能力を最大限に発揮しつつ、一丸となって進んでいくための効果的な組織作りだと考えます。受講生個人としては、事前の机上登山を心がけてください。歩く山の地形・ルートを調べる、歩行時間を考える、当日の天候・気温の予想をする、個人装備を確認する。準備は楽ではありませんが、予習をすることで体力やペース配分に余裕ができ、もっと登山を楽しむことができます。登山では危険のあることを知り、安全な登山をしていくことは登山者の責任です。常に登山計画を見直して、仲間と楽しく安全に山に登れるように一緒に学んでいきましょう。

登山学校運営委員会委員長 榎 将美

【東海 Youth】

中日文化センター山ガール講座の卒業生有志でスタートした東海 Youth も早いもので6年目を迎えた。「自分たちで計画して自分たちで行動する」を合言葉に現在18名の会員が毎月の定例山行に加え、積極的に個人山行をおこなっている。今年のGWには山田副支部長の指導員のもと、3名が阿弥陀岳南稜に挑戦した。また初の試みとして今年の夏山フェスタで新人会員の勧誘をおこなうことにもなった。

一歩ずつ確かな足取りで歩み続ける東海 Youth にますますのご指導をよろしくお願ひします。

東海 Youth 代表 服田康宏

【山行委員会】

■平成 30 年 3 月～5 月の支部山行実施状況

日程	山城	山名	参加人数	リーダー
3 月 16~17 日	九頭竜川流域	細谷又山	5 人	伊藤
24 日	高島トトレイル	(変更) 三国岳	21 人	市川
24 日	京都 東北部	瓜生山ほか	7 人	天野
28 日	伊吹山地	池田山	8 人	石井
31 日	鈴鹿	霊仙山	7 人	鈴木
4 月 7 日	松阪	伊勢山上	5 人	石田
11 日	鈴鹿	御在所岳・本谷	中止	山田
14~15 日	八ヶ岳	赤岳	中止	栗木
14~15 日	北アルプス北部	白馬乗鞍岳	中止	稲葉

日程	山城	山名	参加人数	リーダー
25 日	奥美濃	左門岳	中止	石井
28 日	鈴鹿	イブネほか	8 人	天野
5 月 3~6 日	北アルプス北部	奥穂高岳ほか	3 人	栗木
12 日	野坂山地	野坂岳ほか	4 人	吉田
12 日	中央アルプス	木曾駒ヶ岳	中止	石田
20 日	瀬戸市 東方	猿投山ほか	5 人	大矢
23~24 日	天城山系	万三郎岳ほか	4 人	石井
25~27 日	中央アルプス中部	檜尾岳ほか	6 人	山田
26~27 日	高島トトレイル	大谷山ほか	21 人	市川

※支部山行ホームページで参加者を募集していますのでご覧ください。

山行委員会委員長 鈴木慎吾

会 務 報 告

【2018年3月常務委員会】

日時：3 月 28 日(水) 19 時 00 分～20 時 40 分

1. 支部長挨拶(高橋)：先週、笠ヶ岳に学生達と行った。積雪の為途中まで引き返したが学生達は元気で今後は山岳部として育てていきたいと思っていた矢先の事、日曜日に八ヶ岳での遭難事故を聞いた。改めて指導者の技術向上などしっかりとやりたいとの旨の報告があった。

2. 委員会報告

①会計(市川)：来年度の各委員会予算の確認を行った。

②岳連(鎌倉)：来年度の総会は 4 月 14 日に行う旨の報告があった。又、高橋支部長から愛知岳連の加盟者数が 6 名と非常に少ない旨の話があり東海支部からは 10 名ほど登録する予定という事になった。

③支部友委員会(金谷)：2 月の山行は 5 件、全て予定通り実施した。3 月の計画は 3 件、内 3 月 24 日の各務原アルプスの申し込み者が 1 名の為、中止。支部友ミーティングは 4 月 10 日

に「山で死なない方法」のテーマで山田副支部長の講演を予定。6 月 12 日は「夏山への誘い」で支部友に説明会を実施。会員移動はなく 131 名。

④山行委員会(鈴木) 委員長欠席の為、資料配布のみ。

⑤猿投の森づくりの会(小川)：3 月 6 日わいがや講座、3 月 13 日定例作業、3 月 17 日定例観察会、3 月 24 日定例作業、3 月 27 日民有林整理は予定通り行った。民有林整理は雑木林の大きな木の伐倒をするという作業だが後 2 回くらいで終了する予定。4 月の活動予定としては、4 月 7 日にわいがや講座、同 7 日に炭焼き、4 月 8 日には長久手まちセン祭りで猿投の森の活動ブースを設けて紹介をする。4 月 10 日は定例作業、4 月 14 日ヤマザクラ観桜会を行う。現在の参加者は 44 名で、50 名を目標にしているとの報告があった。

⑥東海ユース(山田)：2 月 24 日青年部と交流登山は大日ヶ岳を実施、青年部から 6 名参加。3 月 17・18 日大日ヶ岳で雪上訓練を 5 名の参

加で8時間程行った。2月17・18日に本部主催で指導者養成講座の講習会を行った。会員数は25名。H30年度からユースの責任者は服田氏に変わる旨報告。

⑦登山学校・登山教室：天野委員長欠席の為毛利が報告。登山教室については朝日教室を9月で終了、以後は新たな参加者も有る中日教室でのみ開催。登山学校は7月に90名弱の生徒数でスタート。実技については天候により中止となった物もあるが全体には順調に推移している状況である。直近の調査では2年目の継続希望が60名余有り、新たな募集は若干名とする予定であるとの報告。4月以降は委員長に榊さん、副委員長に石田さん・服田さん・今津さんになる。今後は登山学校が母体となりその下に登山教室が位置づけられることになった。会計は別個とするが登山学校委員会で統括。第2期の登山学校継続については、常務委員会で正式承認された。

⑧遭難対策委員会(山田)：登山計画書の提出は731件と多数出るようになった。ただ、電話での連絡が58件と減少する傾向にありFAXに変更していく方向。今後の登山計画書の提出については一部変更があり。

4月1日から支部へ提出された登山届は本部へ自動転送されることとなるため、別箇本部への提出は不要になる。登山届けのメールの件名の箇所に、入山年月日、東海支部、委員会・同好会・個人の区別と目的の山・リーダー名のみ記載し、登山計画書は添付ファイルとする。ただし登山計画に修正がある場合は“修正”と記載をしたうえで東海支部に再提出をする様にしてほしい。また、本部から届いている登山届け及び遭難対策の在り方については、東海支部内で対応可能な方法の検討を行い本部に提案する予定である旨報告。

⑨自然保護委員会(井藤)：報告は提出資料の通りで、追加の報告としてモニタリング1000に登録してある3件の事案については、3年以内に実施すれば良いとの事。

⑩ボランティア委員会(前田)：第10回ひまわり登山は4月23日に4名の参加、支援者8名で計画。春のブラインド登山は5月12日綱掛山を予定、参加者は現在の所10名、最終的には20名位の予定で、支援者15名で実施の予定。身柄付き補導登山については下見山行と裁判所の人との打合せを済ませた。参加者は家庭裁判所6名、東海支部5名で6月14日、15日に

行う事を決定した。主催は日本山岳会東海支部、支援として名古屋家庭裁判所友の会。委託は名古屋家庭裁判所となった旨報告。

⑪写真展実行委員会(井上)：出展数は87点あり、バラエティに富んだ物が多く、来場者からの評価は良かった。中日新聞も県内版に載せてくれ、NHKからも後援が取れた。期間中の来場者は2293名。支部員の来場者は123名だった。問題点としては今回パネル製作を新規の業者に依頼した処、写真マットの波うちや剥がれ等が生じた。また、これらの事業・イベントは山岳会の本部で事業報告として出るが、東海支部の活動について前回写真展の記事がなかったので是非出していただきたいとの要請あり。

⑫総務(毛利)：4月27日に評議委員会を開催の予定。5月20日に支部総会を開催する。今年の講演は神戸大学山岳会会長の井上達男氏に「未知への挑戦」のテーマで行う予定である旨の報告があった。講演会の聴講については支部員だけでなく青年部・東海ユースや学生の方も可とするので、興味のある人は来て欲しい旨報告。

⑬亀の会(加藤)：亀の会会員の訃報の報告あり。

⑭技術向上委員会(片岡)：名市大で開催したレスキュー講演は東海支部主催、愛知岳連共催で行ない好評だった。施設が充実しており、「低体温症の対応」をテーマにスムーズに行われた。参加は40名ほど。技術向上委員会の活動としては次期リーダーの育成と支部員の技術向上をテーマとしている旨の報告があった。

⑮支部報編集委員会(星)：支部報第153号は30日に発送する旨報告。

⑯インドヒマラヤ(星)：インドヒマラヤ遠征参加予定の隊員は5名となりメンバーが決まりつつある。総会の時に壮行会を行う予定である旨報告。

⑰夏山フェスタについて(毛利)：次回の支部報に夏山フェスタのチラシを同封するので宣伝してほしい旨要請。また、10月27日の森の音楽祭の実施に向けて5月から実行委員会を始める為、協力の要請もなされた。

出席：高橋、井上、小川、毛利、市川、山田、井藤、箕浦、尾上、佐野、星、片岡、鎌倉、石田、前田

【2018年4月常務委員会】

日時：4月25日(水) 19時00分～20時45分

1. 支部長挨拶(高橋)：元支部長の湯浅氏が先日ご逝去された。大変功績のあった方で数々

のヒマラヤ登頂や若手育成に取り組まれた。心よりご冥福をお祈りする。また、大坪氏もご逝去された。氏の御意向で若手育成にと寄付金をいただいた。ご遺志に沿い、チャレンジ基金へ積み増しとしたい→了承。総会が近くなってきた。各委員会では役員交代もあったかと思うが、滞りなく引き継ぎをお願いしたい。

2. 委員会報告

①会計(市川)：昨年度決算及び今年度予算、委員会費について配布資料に基づき説明。昨年度からの繰越が増えている。登山学校による収益と経費節約によるもの。今後評議委員会及び総会を経て決定する予定。

②支部友委員会(金谷)：配布された資料に基づき3月～4月の山行及び4月～9月の支部友ミーティングについて報告。山行については参加者が固定化してきている。登山学校生からの参加が増えるよう工夫したい。一方、4月の支部友ミーティングについては登山学校からの参加者が多かった。

③山行委員会(鈴木)：配布された資料に基づき3月以降の山行及び今後の山行計画について報告。新たにリーダーとして杉村氏就任。山行委員へは幌尻岳の事故資料を配布し、今後の事故防止を図った。

④猿投の森づくり委員会(小川)：配布された資料に基づき4月の活動及び5月の活動について報告。先般より行っていた民有林の整備について所有者より会の取り組みに感心したとして寄付金をいただいた。

⑤亀の会(加藤)：最近、急遽山行に参加できなくなる事例が増えている。高齢化しており、やむを得ないと思う。4月の山行は文珠山、阿弥陀山。5月の山行は高野山を予定している。

⑥東海ユース(服田)：4月より代表交代した。配布資料に基づき、4月～6月の山行及び山行計画について報告。今年度のテーマを会員一人ひとりが考えて行動する、支部活動に積極的に参加するを掲げて進めていく。

⑦支部報編纂委員会(星)：No. 154 の原稿について配布資料に基づき報告。他にも記事があれば積極的に提出いただきたい。

⑧登山学校運営委員会(神)：4月より代表交代した。配布資料に基づき3月～5月の山行及び山行計画について報告。次期の継続受講調査が終わり、現在班編成を行っている。7月7日に第二期開校式及び第一期の閉校式を行う。

⑨自然保護委員会(井藤)：配布された資料に基

づき活動について報告。今後の方針として、研究・観察にとらわれず山行を行っていきたい。

⑩図書委員会(石田)：報告事項なし。

⑪インドヒマラヤ(星)：隊の編成が決まった。愛知学連、岐阜岳連後援。山行先は未踏峰(無名峰)。総会後の懇親会の時メンバー紹介を行う予定。

⑫ボランティア委員会(前田)：配布された資料に基づき4月の活動及び今後の活動について報告。SON 愛知支援登山について現在内容を詰めているところ。

⑬遭難対策委員会(山田)：配布資料に基づき報告。支部遭難対策規定について今後作成。併せて支部山岳救助活動規定等も実情に合わせて見直しをする。

⑭写真展実行委員会(井上)：写真展の実施結果について報告。2300人弱の来場者があった。次回より委員長は山内氏へ交代。

⑮技術向上委員会(片岡)：配布資料のとおり、文科省主催の安全登山サテライトセミナーの情報入手。今後続報が得られ次第、情報を公開する。

⑯東海学生山岳連盟(丹羽)：冬山強化プロジェクト「プロジェクトK」について無事終了の旨報告。GWに瀧根ガイドの協力を得、明神岳南西尾根登攀予定。5/25 総会実施。

⑰青年部(鎌倉氏欠席につき高橋氏より説明)：4月より委員長交代。GWは部としての合宿はないが、8名でスペインへクライミングに行く予定。

⑱デジタルメディア委員会(井上)：4/1～登山届の本部への転送始まり問題なく進んでいる。今年度はHPをスマホに対応し少し改修を行う予定。

⑲海外登山(高橋)：カナダノーザンカリブー山郡山スキー縦走について先ほど無事終了したとの連絡があった。

⑳総務委員会(毛利)：総会資料案提示。この内容で総会に提案したい→了承。6/23～24 夏山フェスタを今年も行う。例年通り皆さんには応援をお願いしたい。

出席：高橋、佐野、山田、片岡、尾上、市川、鈴木、加藤、和田、前田、箕浦、星、小川、井上、井藤、毛利、石田、金谷、神、服田、丹羽

【2018年5月常務委員会】

日時：5月23日(水) 19時00分～21時00分

1. 支部長挨拶(高橋)：東海支部総会が無事終了した旨報告。支部長就任時に掲げたトリプル

ワンの目標を今年も目指していきたいので皆さんのご協力をお願いしたい。とりわけ東海支部の皆さんが連帯感を持つ目標についてはこれからの2年をかけて具体化していきたい旨発言有。また、東海支部として海外への登山隊を派遣できるよう目指していきたい旨報告。

2. 委員会報告

①会計(市川):各委員会には本日本年度分の委員会活動費をお渡しするので、年度末での事業報告並びに清算をお願いしたい。

②支部友委員会(金谷):配布された議事録に基づき4月・5月の山行状況と同時に6月の山行予定につき報告。あわせて支部友ミーティングの予定についても報告。現在会員数は111名。

③山行委員会(鈴木):配布された議事録に基づき、山行の実施状況、山行計画につき報告。登山学校の指導員が不足している為、山行委員のなかから新規指導員を派遣することとなった。現在のHPによる山行が参加者の固定化、募集開始後短期間で募集が締め切られるケースが多々あることから、山行予定日の間近でも山にいける仕組みづくりとしてLINEグループを活用した自主山行の募集を試行したい旨提案があった。募集案に基づき説明を受け、審議の結果Lineを利用による山行そのものはOKだが、情報拡散を防ぐ手立てを考える必要があること、山行実施間際の山行計画書提出になる恐れがあることから、計画の審査する時間が無くなるおそれがあるなど提案内容にはリスク管理等問題点もあるようなので、今一度仕組みの中身を精査の上再提案していただくこととなった。

④亀の会(欠席):資料のみ配布。担当山田副支部長より、亀の会活動は活発にしているが、自主山行では無理な計画もあるようなので慎重な計画を立てる様にしたい旨の報告があった。

⑤猿投の森づくりの会(小川):提出された報告書に基づき、4月末～5月末の活動及び6月の活動予定につき報告。6月9日開催予定の猿投の森づくり総会にて役員改選を予定しているため、組織図案に基づき新体制につき説明。組織図によると、中世古直子氏に引き続き監事をお願いする計画のようだが、支部は中世古氏に代わり天野倅明氏に監事をお願いしたので同様にしては如何かとの意見あり。それ以外はとくに異論なし。副代表を1名から2名に増員を予定しているのに伴い会則の改正も必要となる旨報告あり。

⑥東海ユース(山田):会員数18名。活動報告に基づき山行実施状況、山行計画などにつき説明。6月23日・24日の夏山フェスタでは新規会員の募集を行う予定である旨報告。

⑦支部報編集委員会(星):7月1日発行予定の支部報No.154の予定内容を提出された資料に基づき報告。

⑧青年部(田島):5月の定例山行の実施は無く、個人山行は、白馬岳から唐松岳への山行と8名がスペインでのクライミングを行った旨報告。今後のスケジュールは11月3日からの秋山フェスタを計画。会員数は45名。総務委員会から夏山フェスタのサポート依頼を青年部にしているので確認してほしいと報告があった。また、『秋山フェスタ2018』の計画案について高橋支部長より内容の紹介と説明があったが、今一度計画内容を再検討してもらうこととなった。

⑨登山学校・登山教室(榊):山行報告及び山行計画の説明あり。また、テント一張り、医薬品装備品の購入をした旨報告。6月9日・10日開催の安全登山講習研修会に2名派遣することとなった(今津、岡本一他に片岡副支部長も参加予定)。中級が予定しているテント泊山行に個人装備を借用することとした(借用費1,000円/1張)。支部友ミーティング・朝明集会は、'オープンミーティング'とし、登山学校の生徒にも参加してもらうこととした(9月の山行に組み入れる)。登山学校第2期のクラス編成につき、資料に基づき説明。次期入校式は7月7日に予定との報告。

⑩自然保護委員会(井藤):山行及び自然保護委員会全国集会の報告。モニタリング1000の調査準備を始めるにあたり若い人を確保し準備を進めていく旨の報告。

⑪ボランティア委員会(前田):春のブラインド登山、タンポポ登山(身柄付き補導委託登山)、知的障がい者支援登山、親と子のふれあい登山、視覚障がい者全国交流登山、秋のブラインド登山につき報告。

⑫海外登山委員会(星):現在、決定した5人の隊員の登山許可の申請中で、IMFより仮許可は得た。飛行機の手配は済。登山隊の役割など中身を決める作業を今後予定。

⑬遭難対策委員会(山田):登山届状況報告。本部遭難対策規定改正に基づき、東海支部の山行計画書の提出内容などを検討中、6月の正副支部長会議での審議をへて、常務委員会に諮りた

い旨報告。

⑭技術向上委員会(片岡):支部総会時に講演をいただいた井上達男氏に東海支部に入会をしていただいた。今年も支部活性化資金の支給を受ける事になったので昨年の活動については評価されたものと考えている旨報告。

⑮写真展実行委員会(山内):高橋支部長からカレンダー制作について今年も継続されることの確認があった。

⑯総務委員会(毛利):森の音楽祭は10月27日に実施予定でプログラムの内容が固まりつつ有る。全国植樹祭なごや2019を支援するプロジェクトとして、スギ花粉の少ない杉の苗木の植樹を検討中。

出席:高橋、山田、片岡、佐野、市川、金谷、鈴木、小川、星、榊、星、井藤、毛利、山内、田島、前田

総務委員会 毛利邦男 記

ル ー ム 日 誌

3月

- 1(木) 写真展委員会
- 2(金) 古道塩の道
- 5(月) 支部友委員会
- 6(火) 県岳連
- 7(水) 青年部 TNCC(同好会)
- 8(木) 自然保護委員会
- 12(月) 登山学校・教室委員会
- 19(月) 図書委員会、読図会
- 20(火) ボランティア委員会
- 21(水) 東海学生連盟/総務委員会・正副支部長会議
- 22(木) 技術向上委員会
- 23(金) 山行委員会/総務委員会・正副支部長会議
- 24(土) 東海ユース
- 27(火) 猿投の森運営委員会
- 28(水) 常務委員会
- 29(木) 技術向上委員会
- 30(金) 支部山行打合わせ
- 31(土) 東海ユース

4月

- 1(日) 東海ユース
- 2(月) 支部友委員会
- 3(火) 県岳連
- 4(水) 青年部/TNCC(同好会)
- 5(木) 写真展委員会
- 6(金) 古道塩の道
- 7(土) 登山学校

- 9(月) 登山学校・教室委員会
- 10(火) 支部友委員会ミーティング
- 12(木) 自然保護委員会
- 13(金) 支部山行打合せ
- 14(土) 東海ユース
- 16(月) 図書委員会、読図会
- 17(火) ボランティア委員会
- 18(水) 山行委員会/総務委員会・正副支部長会議
- 19(木) 東海学生連盟
- 22(日) H A T J 総会
- 23(月) 支部山行打合せ
- 24(火) 猿投の森運営委員会
- 25(水) 常務委員会
- 26(木) 技術向上委員会
- 27(金) 亀の会 (14時~17時)

5月

- 7(月) 支部友委員会
- 8(火) 県岳連
- 9(水) 青年部 TNCC(同好会)
- 10(木) 写真展委員会/自然保護委員会
- 11(金) 古道塩の道
- 12(土) 東海ユース(企画会議)
- 14(月) 登山学校運営委員会
- 15(火) ボランティア委員会
- 16(水) 山行委員会/総務委員会・正副支部長会議
- 18(金) 東海ユース(ロープワーク講習)
- 20(日) 支部懇親会
- 21(月) 図書委員会、読図会
- 22(火) 猿投の森運営委員会
- 23(水) 常務委員会
- 24(木) 技術向上委員会
- 25(金) 東海学生連盟総会

会員異動

入会: 井上忠臣(16312) 井上愛子(16313)
 鬼頭幸子(16316) 日比野重成(16322)
 岩田智与子(16323) 川上真澄(16333)
 杉浦勝美(16324) 天野慶子(16347)
 井上達男(13000)

退会: 坂井博一(12261) 早川 博(15579)
 伊藤ななみ(14817) 野内ふさ子(14338)
 長岡光恵(15220) 小林直人(8793)
 吉永愛人(15844) 鈴木正典(13830)
 菅谷 実(12741) 藤田崇宏(15906)
 不破裕治(15124)

INFORMATION

【森の音楽祭実行委員会からのお知らせ】

第10回森の音楽祭2018を下記要領にて開催します。皆様お誘いあわせの上参加ください。今回は第70回全国植樹祭あいち2019応援イベントとして、第1部の後、記念植樹会も行います。

日時：10月27日(土) 10時～15時30分

場所：猿投の森特設会場(県有林やまじの森)雨天の場合は、瀬戸蔵で演奏会のみ行います。集合場所・時間：名鉄瀬戸線 尾張瀬戸駅前 午前7時30分から受付、受付終了8時30分

集合場所シャトルバスで猿投の森入口まで先着順に送迎。森の入り口から会場までは徒歩40分程。

参加費：500円

申込方法：官製はがき・FAX・e-mailにて、氏名、電話番号、Fax番号を記入、第2部にも参加希望の方は、ご希望のプログラム名(自然観察会orハイキング)記入の上ご応募下さい。

【申し込み先】

ハガキ：東海支部 森の音楽祭実行委員会

ファックス：052-322-7924

メール：sanagenomori@gmail.com

内容：

第1部：演奏会(10時15分～11時50分)

- ・音楽ユニット「ゆらゆらミルフィーユ」による和太鼓・篠笛の演奏
- ・東海学園交響楽団によるオーケストラ演奏
ブラームス 交響曲第1番ハ短調作品68番
と参加者全員による「雪山讃歌」の合唱

第2部：森の体験(13:00～15:30)

- ・全国植樹祭応援記念植樹(希望者・代表者により花粉の少ないスギを植えます。)
- ・自然観察会
- ・猿投山山頂を目指したハイキングと川歩き(沢登り疑似体験)

注：参加者には、猿投温泉の無料平日入泉券の配布予定しています。詳細は支部報に同梱したチラシをご覧ください。

森の音楽祭-支援スタッフ募集中！！

森の音楽祭実行委員会では、森の音楽祭の事前準備作業(3日間ほど予定しています)に参加していただける方ならびに当日のお手伝いをして頂ける方(支部員、支部友会員(登山学

校含む)、青年部、東海ユース)を募っています。ご協力していただける方は、森の音楽祭実行委員会 毛利邦男までご連絡下さい。

メールアドレス：kunio-mohri@asahinet.jp

携帯電話：090-2771-7280

森の音楽祭実行委員会 毛利邦男

【写真展実行委員会からのお知らせ】

下記のような写真撮影山行を企画しています。是非、参加をご検討ください。

① 涸沢

- ・月日：9月25日～27日 2泊3日
- ・交通手段：公共交通機関
- ・宿泊：横尾山荘 涸沢ヒュッテ
- ・撮影対象：紅葉の涸沢と穂高連峰
- ・申込締切：8月末
- ・リーダー：坂本 孝

*東海支部のHPに詳細が掲載してあります。メニューで「写真展実行委員会」をクリックしてください、

*月日や行程、移動方法は参加希望者との相談で変更する可能性があります。

*参加希望、問い合わせは、

山内(090-1723-2847, yamauchi@orihime.ne.jp)

または、写真展実行委員までご連絡ください。

写真展実行委員会 山内 薫

編集後記

青年部部員菊池 徳氏の Canadian Northan Cariboo 山群スキー縦走報告会に参加した。インターネットの利用が日常のものとなり、海外の地理、気象、道路事情や過去の記録など、各情報が日常的に手に入る。とはいうものの現地に行ってみないと本物の体験はできない。自然に向き合う青年達の勇気を称えたい。

本号は、湯浅道男、大坪重遠両氏の追悼文を掲載した。同時代を生きた支部員も少なくなり追悼号は他の機会に発行をしたい

星 一男

海外トレッキングのパイオニア!

世界の山旅を手がけて48年
ALPINE TOUR SERVICE 株式会社

“山仲間オリジナルツアーを企画しませんか?”
説明会にお伺いします。お気軽にご相談下さい

名古屋 052-581-3211 アルパインツアー 検索
〒450-0002 名古屋市中村区名駅3-23-2 (第3千禧ビル3階) www.alpine-tour.com



ATLAS TREK

ハイキングから本格的な高峰登山までお気軽にお問い合わせ下さい。
観光庁長官登録旅行業第1167号 / (社) 日本旅行業協会正会員

株式会社アトラストレック

【東京本社】〒160-0004 東京都新宿区四谷2-10-5 ハツ橋ビル301
TEL:03-3341-0030 FAX:03-3341-9200 E-Mail: info@atlastrek.co.jp
【大阪支店】〒530-0012 大阪市北区芝田2-8-7 八木ビル4階
TEL:06-6147-8031 FAX:06-6147-8032

ホームページ http://www.atlastrek.co.jp/

SINCE 1975

mont-bell

ウェア・ギアに
遊び心もそろえて
お待ちしております

アウトドア用品は、
機能的なアイテムが豊富に
そろったモンベルストアへ。



- Outlet 名古屋店 愛知県名古屋市中区栄3-18-1 ナディアパークロフト 6階
- Outlet 長久手店 愛知県長久手市片平1丁目901
- Outlet 名古屋みなと店 愛知県名古屋港区品川町2-1-6 イオンモール名古屋みなと3階
- 各務原店 岐阜県各務原市那加萱場町3-8 イオンモール各務原 2階
- Outlet 長島店 三重県桑名市長島町浦安368 三井アウトレットパークジャズドリーム長島 2階
- 鈴鹿店 三重県鈴鹿市庄野羽山4-1-2 イオンモール鈴鹿 1階
- 2018年7月11日オープン予定
モンベルルーム 御在所店 三重県三重郡菟野町大字菟野8625 (御在所ロープウェイ前)
- 新静岡店 静岡県静岡市葵区鷹匠1丁目1-1 新静岡セノバ 4階
- ららぽーと磐田店 静岡県磐田市高見丘1200 ららぽーと磐田 1階

Outlet アイコンのある店舗では、アウトレット商品も取り扱っています。

【お問い合わせ】 0088-22-0031 / TEL.06-6536-5740
モンベル・カスタマー・サービス ※フリーコールは携帯・IP電話からご利用いただけません。

建設業許可を取りたい、日本国籍を取得したい(帰化)、遺言を公正証書で作成したい、戸籍謄本や除籍謄本を代行取得して欲しい、任意成年後見の相談をしたい、会計記帳を頼みたい等々

ご相談は行政書士の西山秀夫へ

〒460-0002名古屋市中区丸の内3丁目21番21号
(地下鉄・久屋大通駅から徒歩2分) 丸の内東桜ビル1004号室

TEL: 090-4857-9130

URL: http://www.nygs-office.com/

企画・デザイン・印刷



株式会社 浅井隆文社

〒461-0044 名古屋市東区矢田東1番22号
TEL (052) 719-0677 FAX (052) 719-0678
E-mail: info@asai-rbs.co.jp

***** OMC *****

住いのコンサルタント

(有) 富士見企画

〒460-0014
名古屋市中区富士見町8番8号

株式会社 ワークシステムサービス

一般社団法人 日本自動車運行管理協会
一般社団法人 中部地区自動車管理業協会

- 一般貸切旅客事業
- 車両運行管理事業
- 愛知県知事登録旅行業
- 労働者派遣業
- ビル清掃管理事業
- 介護支援事業

〒465-0021 名古屋市名東区猪子石3丁目113番地
TEL 052 (779) 8777(代) FAX 052 (779) 0031
http://www.work-system.co.jp/